

會誌

NICHE

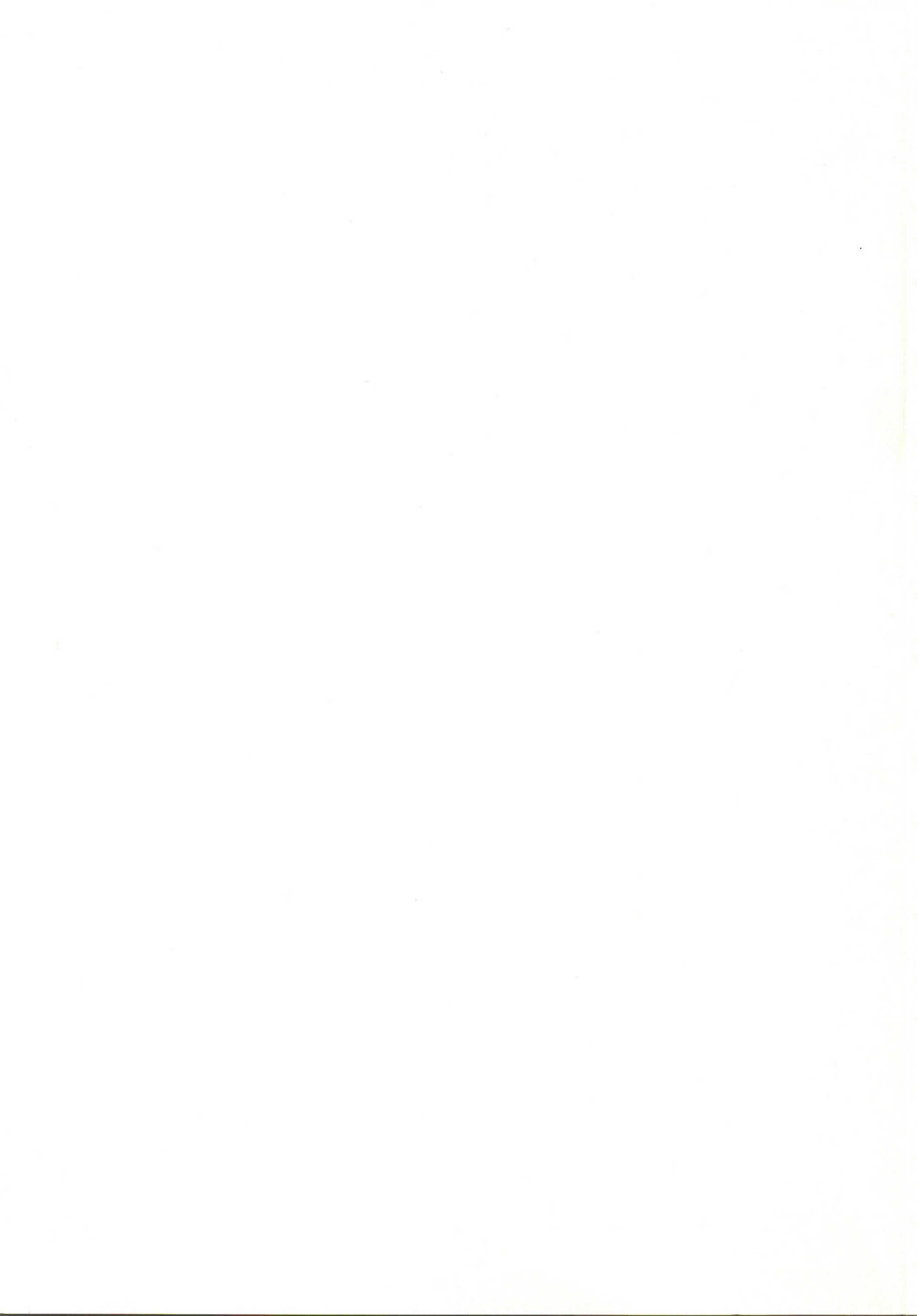
1994
volume
18

工学院大学建築学科同窓会誌

龕がらみ 1. 仏像を組める厨子. 2. 棺 (ひつぎ) — 広辞苑

ニッチ [Niche] (独 Nische) 龕 (がらみ) とも書かれる. 壁体内に掘られ, 多く平面半円, 半円筒状で, 上に1/4半球をいたたく凹所. 彫像などを置く. — 共立・建築辞典

niche (nich), n. {Fr. niche, from L. nidus: a nest} 1. a recess or hollow in a wall usually intended for a statue, bust or vase. 2. a place or position particularly suitable for the person or thing in it. — Webster's New Twentieth Century Dictionary



- 02 『NICHE』 vol.18発刊によせて 高木雅行／建築学科同窓会会長
03 建築学科の近況 難波蓮太郎／建築学科主任教授
04 大学院建築学専攻 荻原正三／建築学科教授
05 建築都市デザインコース都市専攻 中嶋泰／建築学科教授
06 建築都市デザインコース建築専攻 山下司／建築学科教授
07 建築学コース計画系 荻原正三／建築学科教授
08 建築学コース構造系 望月洵／建築学科教授
09 建築学コース環境設備系 水野宏道／建築学科教授
10 建築学コース生産系 吉田倬郎／建築学科教授

11 TOPICS

同窓会第28期総会開かれる
同窓会主催／高橋志保彦氏講演会
『工学院大学学園百年史』刊行
生涯教育センター・公開講座
第29期総会のお知らせ
建築学科各研究室合同OB会開催予定
吉田辰男名誉教授、大庭常良名誉教授逝去
コンペ入選者

- 14 都心での再開発／工学院大学 新宿テクノキャンパス
——エステック高度情報学園街区 (STEC :Shinjuku Techno Campus)
谷口宗彦／工学院大学建築学科助教授

- 18 同窓生を訪ねて
秋元俊雄氏に聞く

- 24 同窓生からの便り
伊藤真人 (1968年度卒業) クッセツ20年
中村好男 (1971年度卒業) 新潟・上越地区での同窓会
猶 克美 (1978年度卒業) 西サモアでの国際貢献
後藤成身 (1984年度卒業) オランダ留学顛末記

- 31 工学院大学建築学科同窓会誌『NICHE』発刊のための賛助金のお願い
工学院大学校友会STECカード加入のお願い

- 32 第27期 (1992年) 事業報告／一般会計報告／運用財産目録／財産運用報告一般会計報告
第28期 (1993年) 一般会計予算／事業計画(案)／一般会計予算(案)

- 36 平成5年度建築学科卒業生名簿

『NICHE』 vol.18発刊によせて

工学院大学建築学科同窓会会長
高木雅行 (1982年修士課程修了)



建築学科同窓会の皆様には、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

昨年の同窓会総会では220名の皆さまの出席で盛大に開催することができましたこと御礼申し上げます。また、開催の準備と連絡のためご尽力いただきました各研究室の運営委員の皆さまには重ねて御礼申し上げます。

現在、建築学科の卒業生は約8,500名の方が名簿に記載されております。この卒業生の人数と、新宿での工学院の発展ぶりを見るにつけ、よりいっそうの会の活性化が望まれるところです。しかし現状は、卒業生間のネットワークや、母校との連携などは非常に苦手ようです。私もこうした役割をさせていただくまでは、詳しく知りませんでした。工学院大学は、工手学校として明治20年10月31日の設立以来106年の歴史をもつ学校として、数多くの人材を社会に輩出してきました。今回の『NICHE』には、そうした伝統ある本学園が最新の都市型大学として生まれ変わった経過について、同窓会副会長でもあります谷口宗彦先生より原稿を寄せていただきました。伝統に加え、この最新で、もっとも都市的な大学としての誇りをもち、卒業生の強力なネットワークをつくりあげようではありませんか。そうした卒業生の交流こそが工学院のさらなる発展と、後に続く数多くの後輩の方がたが、誇りをもって社会へ出発していける環境となることでしょう。

今年の同窓会総会は、5月29日開催予定としました。なかなか交流のない他学科の皆さまとの親睦をはかるため校友会総会の同日に開催する予定で準備を進めております。終了後、校友会主催で盛大なパーティーが行われます。費用

は無料ですのでぜひご出席下さい。

10月29日・30日には神戸において校友会全国大会が開催される予定です。兵庫県の校友会、岡本支部長は建築学科出身の方で現在その準備に奔走していらっしゃいます。支部長より度重なるお誘いがあり、建築学科同窓会では全国より多数の皆さんの参加で岡本支部長を応援したいと思っております。またその際、9月に開港予定の関西新空港等の見学会なども計画しており、楽しく集える企画を検討中です。ぜひ多数の皆さまにご参加いただけますようお願いいたします。9月には具体的なご案内状をお送りしますのでご覧ください。

今年の講演会、懇親会は12月3日に開催する予定です。これは昨年お集りいただきました皆さまから、6月では時期的に中途半端で集まりにくいとの意見が多く、よりいっそうの皆さまに出席をいただき1階アトリウムで盛大に行えるようにと役員・運営委員で検討を重ねた結果、一番要望の多かった12月の上旬に行う予定としました。例年、この時期には多くの研究室がOB会を開催しておりました。当日は、計画系、技術系の先生がたによる講演をあわせて開催、アトリウムでの懇親会の後、各研究室のOB会を開いていただけのよう準備を進めております。先輩がたからもこのような企画なら当日、研究室の先生とほかの先生にも会えるのでとても楽しみだとの意見もお聞きしました。11月には案内状をお送りできると思いますので、ぜひご参加ください。

建築学科の近況

工学院大学建築学科教授
難波 蓮太郎



本学1部建築学科は建築学における各分野の社会的ニーズと有能な人材を育成するため、建築学コースと都市建築デザインコースの2コース制を導入しました。いよいよこの春から新設されたコースに4年生が誕生いたします。いよいよ就職ということを考えていかななくてはならないのですが、全国的な不景気だという時に新設のコースの学生を世に送りださなくてはなりません。これらの新4年生のためのカリキュラムが最終的に決まりました。両コースとも世の中に出る最初の卒業生だということで心を引き締めて勉学に励んでいただきたいと思います。同窓生の皆さんも、新しいコースの最初の卒業生だということで、期待が大きいことでしょう。その期待に応えるように、学科としても教職員が一体となってバックアップしていききたいと思います。

2部も再開されまして、新4年生が誕生いたします。これも1部と同じことがいえます。再開されました2部建築学科は、社会人教育を重点としております。現在在籍者数は80名弱ですが、一般入試で入学したかたは少なく、その大半が社会人としてすでに働いており企業から推薦されて入ってきたかたたちです。ですからこの中には文科系のかたもおりますし、理工系でも他学科のかたもおります。自分の所属する企業の中から建築の素養を磨きたいというかたが大勢いるわけです。そういう意味でも新しい2部の卒業生だといえるのではないのでしょうか。皆たいへん優秀です。期待していただきたいと思います。

一昨年度まで数年間は就職希望者ひとりに対して20数社の求人がありました。昨年度はややそれが落ちましたが、建築学科はそれでも18~9倍の求人がありました。今年度はたぶん15倍くらいではないでしょうか。他の情報工学関係

などは求人が半分に減ってしまっています。建築学科は17%減くらいです。本学の工学部の中ではもっとも痛手が少なかった学科です。いままでは超大手企業とか大手企業に多くとっていただいていたため中堅の企業が本学の学生をとりたくてもとれない状況でした。ところが今年あたりは、大手が採用を少なくしても中堅企業の求人はあまり減っていないわけです。今年度もほぼ100%の就職率でしたが、欲をださなければ来年度も就職率はほぼ100%であろうと思われれます。来年度は建築学コースからの卒業生は200名弱、そのうちの約100名が計画系に所属しております。都市建築デザインコースの新4年生も約100名弱です。彼らはやはり計画系の就職を希望するでしょうから、合計200名弱の計画系への就職希望者となるわけです。これだけの数をどのようにして世の中に送り込もうかというのは、建築学科としては最初で最大の試練となるでしょう。またこれは本学だけに限ったことではなく他大学でも同様なのですが、企業的女子採用が激減しています。本学科では約2割が女子学生です。非常に厳しい状況ではありますが、建築学科としては積極的にバックアップをするべく鋭意努力をしております。同窓生の皆様の心づかいも期待しております。

2001年には18歳人口が現在の200万人から150万人へと減るといわれています。おそらく多くの大学がつぶれてしまうでしょう。そういう状況の中で、積極的にレベルをあげて優秀な大学を目指していかなくてはなりません。大学としては学部増を考えております。少なくともあと5年のうちには1学部増やして2学部にはしたいと思っております。大学院の充実によって学部生のレベルアップにつながるということで、大学院の専攻科を増加も考えております。

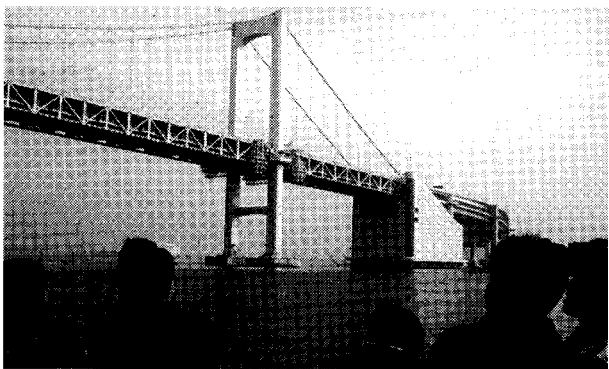
教育、研究両面に長年功績のあった今泉勝吉教授が今年度ももちまして退官されます。先生が建築学科において注がれた情熱に深く感謝いたします。また来年度より安原治機さんが助教授に、近藤龍哉さんが実験講師に昇格いたします。また今年度は客員教授として昨年度から本学で都市デザインの教鞭を執られていた渡辺定夫さんが専任教授となりました。生産系で遠藤和義さんが京都大学の助手から本学の専任講師として招かれました。専門は生産管理とその手法です。32歳ともっともフレッシュな教員で期待しております。都市建築デザインコースと2部の新4年生が誕生するということが今年度から来年度にかけて兼任講師のかたの数もだいぶ増えました。

本学建築学科名誉教授である吉田辰夫先生と同じく名誉教授の大庭常良先生が亡くなりました。慎んでご冥福をお祈りいたします。

(談/文責編集部)

都市建築デザインコース 都市デザイン専攻

工学院大学建築学科教授
中嶋 泰



建築学科の新コースは、都市建築デザインコースとして1991年4月に第1回の入学生を迎え、現在は3年次生までが在籍しております。いよいよ来年度は卒業生を出すわけです。3年次には建築デザインと都市デザインのそれぞれの専攻に別れて各自の進むべき方向、分野の専門科目を選択いたしました。

都市デザインコースは従来の建築学科に設置されていた都市計画科目を基盤として、新たな視点と展開を試みることで、集団としての地域・地区をはじめ、都市レベルと諸事情を建築技術、計画と融和、相互理解を深めつつ勉強することになります。3年次後期に行われた都市デザイン第2では吉祥寺駅南口の都市再開発を題材にし、実際に現地での調査も行われました。都市デザイン第3では新浦安の住宅地をテーマに、調査からデザインまでのプロジェクト型の授業を行う予定であります。

昨年度に本学にいらっしゃった渡辺定夫教授も、だいぶ学生と馴染んできており、授業の一環で行われた東京湾から荒川・隅田川を上った都市景観の調査でも若い学生との活発なコミュニケーションが行われています。また都市デザイン専攻の3年生約30名全員で建築現場を見学するなどの学外授業も多く行われました。この学外授業は専門馬鹿にならないグローバルな視点をもった学生を育てるために、たいへん有用だと思われまます。また都市社会学などの講義も充実させ学生が選ぶ授業に幅をもたせています。

来年度からは、本学同窓生で住宅都市整備公団勤務の加藤常雄氏が兼任講師として参加していただきます。専任・兼任の諸先生とともに都市建築デザインコースの発展充実に努力していききたいと思います。都市に対して第三者的な立場で語るのではなく、当事者として、また創造ものとしての立場からの義務と責任をもった人間増をいかにしたらぞだてられるか、教育の現場から発信できるかを、学生諸君とともにがんばりたいと思います。

新コースも4年目を迎え、卒業生を出すことでひとつの区切りになります。思想的に一貫性を理想としても、思いに任せられない局面に直面することが多々あるかと存じます。皆様のご理解とご支援をよろしく願います次第です。

(談/文責編集部)

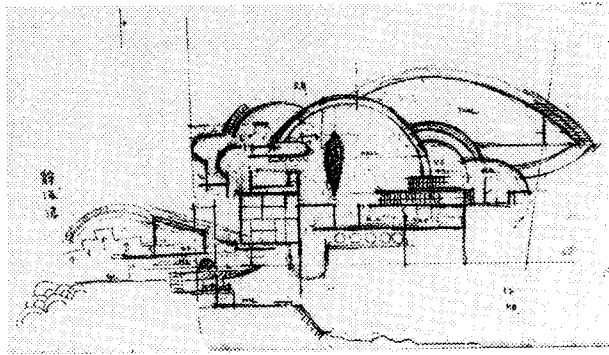
上/都市建築デザインコース都市デザイン専攻の3年生約30名全員が参加した建築現場の見学。

中/東京湾からいかに都市景観が構成されていたかを知るための学外授業。

下/都市デザイン第2では吉祥寺南口の再開発がテーマに行われた。学生たちが現地に赴き調査を行った。

都市建築デザインコース 建築デザイン専攻

工学院大学建築学科教授
山下 司



日本の工学部建築学科というのは、どちらかといいますと技術面を重視したカリキュラムになっている傾向があります。それに比較すると、アメリカやヨーロッパの大学ではアーキテクト教育がメインとなっています。いっぽうエンジニア教育としては、シヴィル・エンジニアリングの中にアーキテクチュラル・エンジニアリング教育が置かれています。それに対して建築家教育というのはアーキテクトを育てるための教育で、デザインに関するカリキュラムが重視されています。日本では東京芸術大学などが例外的にデザインに関するカリキュラムがたいへん多いのですが、そういった少ない例を除けば、多くが技術主体のカリキュラムとなっています。都市建築デザインコースでは全般的な建築教育の中でも、特にデザインを重視した教育をしようという方向をもっています。10数年前、まだ武藤章先生が存命中からそういったことが考えられていましたが、なかなか実現できませんでした。なぜこの新設コースができたかというのは、300人近い建築学科ではいかにもマスプロ教育というイメージがあるということと、都市建築デ

ザインコースと建築学コースの2コースに分けることでひとり当りの教員に対する学生の適性規模が実現できるということでした。デザインを重視したカリキュラムをもつコースをつくらうというメインの目的に、副産物としてこのようなメリットがありました。現在では建築学科内のひとつのコースということですが、将来的には建築学部都市建築デザイン学科というようなひとつの独立した学科にしたいと思っております。いうは易しですが、多くの問題を解決しなくてはなりませんので、すぐ実現というわけにはいきませんが、本学でも第2次ベビーブームの時に定員増を行ったのですが、現在18歳人口が減ってきています。学校の経営上、簡単に定員減は行えません。そこで学科構成をはじめとする組織の改変が必要になってきます。特に私立大学は個性を出すためにぜひ必要なことでしょう。すでに新大学将来計画としてここ4-5年をメドに動きはじめています。新宿校舎も新しくなりましたが、新しい革袋に新しい酒ということで、カリキュラムや組織を考える必要があります。

都市建築デザインコースが開設されてやっと来年度は4年生が誕生します。若い先生がたも一生懸命にやってくれています。実際に「デザイン偏重」といわれるくらいに製図などの授業が多いコースです。1年間終わるたびにカリキュラムの修正をしながらやってきましたが、卒業生を社会に送り出した段階で社会の側の反応がわかります。常にフィードバックを行ってカリキュラムを修正してやっていくことがアーキテクト教育に限らず必要なことだと思います。活力のある、世の中の変化に柔軟に対応できる学生を育てるようなカリキュラムにしたいと考えています。

ここ5年程度でも建築の世界はがらっと変わっています。そればかり追っている学生ではどうしようもありません。自分の中に基本的なものががちりもつことで、未来に対して柔軟な対応ができると思います。ギリシア建築のロマン的なものからローマ建築の幾何学的なものへ、それからビザンチンへ。またロマネスクの幾何学的なものに、それがゴシックの有機的なものへ変わりルネサンス、バロックと、常に過去をフィードバックしながら進んできています。過去を理解し、デザイン力をもって新しいアイデアをどんどん出せる、そんな学生が育ってほしいものです。

(談／文責編集部)

建築学コース 計画系

工学院大学建築学科教授
荻原 正三

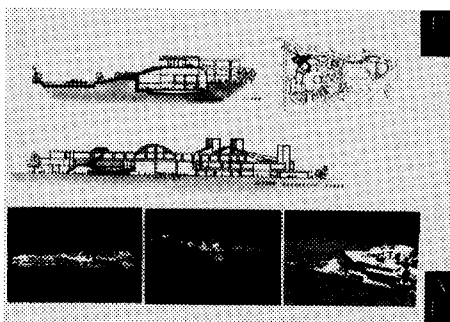
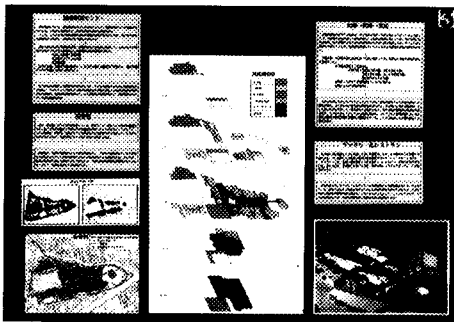


1991年から都市建築デザインコースができました。建築学科の中では、従来は「計画デザイン」といっていた部分が重複するようになりました。建築学コースの学生のうち、半分の約90名が計画系に進んでいます。都市建築デザインコースの学生数を1としますと、建築学コースの学生は2なんです。その2のうち1が計画系で残りの1が技術系です。現在学生は各学年270名程度ですから、計画系、技術系、都市建築学コースが各90名ということです。都市建築デザインコースは都市デザイン専攻が30名程度、建築デザイン専攻が60名という割合です。技術系は構造が約15名、

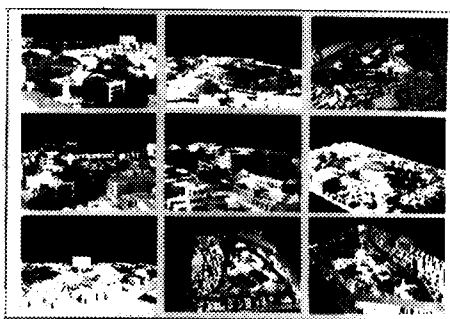
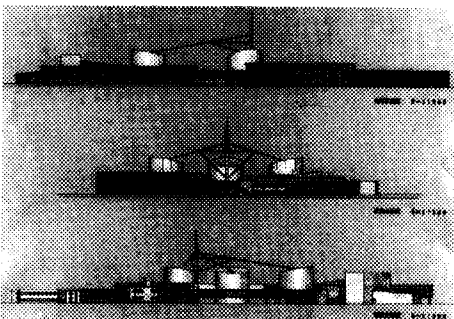
生産系が20～30名、設備系が45名程度となっています。これは毎年ほとんど変わりません。ところが計画系と都市建築デザインコースのティーチング・スタッフはいっしょですし、施設や予算にも限りがありますから、教える側にとってはたいへんな負担になっております。とくに両コースの設計の授業を見るのに人手が足りず、外部から20人以上のかたにお手伝いを願っています。将来構想ではこのあたりをクリアすべく対応策が考えられています。

計画系を卒業した人たちは、設計事務所、官庁、ゼネコン、住宅産業といった分野が主な就職先となっています。デザインコース建築デザイン専攻では設計事務所のウェイトが多くなるでしょうし、都市デザイン専攻は官庁のウェイトが増えるでしょう。しかし建築学コース計画系は、まんべんなくいくでしょう。強みとしては、計画系といっても技術系の勉強も数多くこなしているということでしょう。建築学コース計画系は、従来の建築学科の計画系と同じですから、オールラウンドに建築を学べるわけです。都市建築デザインコースが先鋭的にデザインを追及していくという姿勢に対し、オールラウンドに建築を学ばせるカリキュラムをもっているといえるでしょう。また建築学コースは、将来計画系にいかうか構造系にいかうか、生産系に、環境設備系にいかうかと選択することができるわけです。デザインコースができたから計画系はデザインをまったくやらないというのではなく、むしろよりオールラウンドに建築を勉強できる状況となったといえることができるかもしれません。

(談／文責編集部)

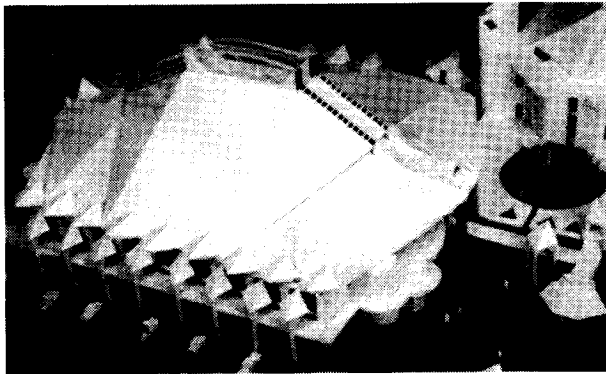


左4点／設計第5の課題。
各チーム3人程度の共同設計で進められる。



建築学コース 構造系

工学院大学建築学科教授
望月 洵



保岡さん、横田さん、正木さんはすでに退職され、現在の教員は十代田さん、広沢さん、望月、宮沢さん、篠原さん、倉持さん、大塚さん、これに加えて近藤さんが講師に昇格され、計8名です。平均年齢、ざっと56歳で、中学生になりたてのころ学んだ「少年老いやすく…」が現実感となってひしひしと…。もっとも、これは構造系に限らずこの系でもです。

中老グループのわりには、このところ学会発表は中身を問わなければ他系に劣らない量です。中老グループを支えてくれているのが大学院生と卒研生で、常時、大学院生は7～8名、卒研生は35名くらいおり、積極的に頑張っています。特に私学では大学院生や卒研生の協力がなければ研究はできなくなっているのが現状で、彼らには感謝感激しています。

大学生の20%は女子となり、旧校舎のころのムサ苦しい雰囲気はなくなっています。構造系でも、離婚するときメシが喰えるよと勧めたせいか、いつも5～6人は在籍しています。年齢差40では、共通した話題をもつのもくろうが多く、知らぬ間に『SPA!』『Tokyo Walker』『Hanako』などの権威になりそうです。

工学の細分化とコンピュータの進歩で構造教育も従来の方法では対応できなくなりつつ、皆さん苦勞しているようです。手を動かさなくても結果が出るし、理論を知らなくても応答解析ができる時代で、このままだと卒業後の問題解決能力に一抹の不安が残ります。

各研究室の主なテーマは、以下の通りです。

十代田研究室	鋼構造の座屈と振動
広沢研究室	RC構造の耐震性
望月研究室	耐震壁
宮沢研究室	木構造
篠原研究室	建築振動
倉持研究室	免震構造
大塚研究室	木構造

八王子大型実験棟はほとんど休む間もなく開かれており、うれしい悲鳴をあげています。

左上の写真は構造系の卒業生には奇跡のような沖縄県立武道館のコンペ1等入賞作品で、松田幸吉君の出世作です。もう1枚の写真は構造系の90～91年度の花です。

建築学コース 環境設備系

工学院大学建築学科教授
水野 宏道



現在、環境設備系の体制は中島研究室、足立研究室、大橋研究室、宇田川研究室、それに水野研究室と合わせて5つの研究室です。

環境設備系の演習科目では専任と兼任の教員がコンビで行っているのが特徴でしょう。特に2部では編入しやすいカリキュラムになっており、文系で2年間学んで3年次に本学に編入しても専門科目に対応しやすい履修システムとなっております。環境設備系では兼任講師を選ぶときに、できるだけ本学を出て社会で活躍されているかたを採用するように留意しています。それは、学生から見た場合に、ひとつの越えるべき目標となり得ると考えるからです。よい刺激になると思います。外部から兼任講師を呼ぶというのは、スケジュールの調整などの手間が増えるわけですが、学生のためになるのですから、そのための労苦は厭わない姿勢です。

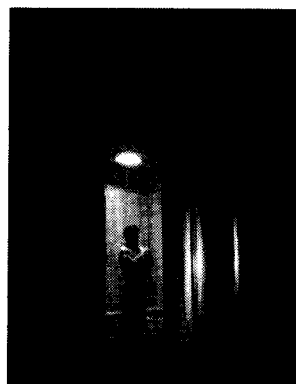
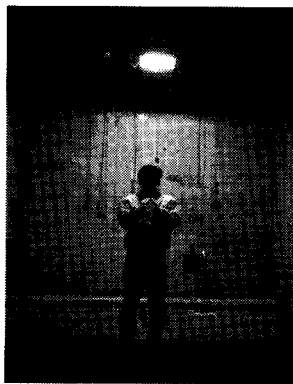
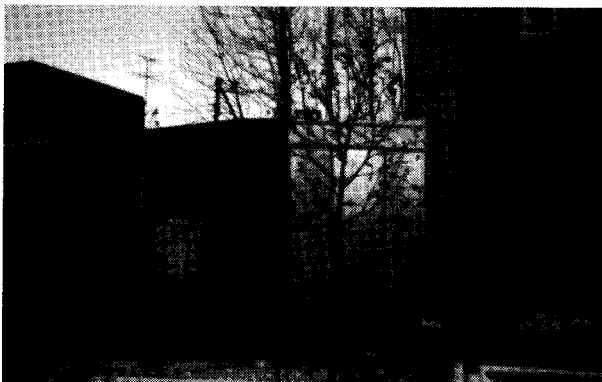
環境設備系の教員が学協会の役員とか委員長である場合が多く、社会での活動が活発です。また教員だけでなく、大学院修士課程の論文は建築学会や空気調和衛生学会、太陽エネルギー学会などに出しています。

このところ環境設備系の学生は毎年50人前後です。現在世間は不景気ですが、幸いなことに就職率は落ち込んではいません。しかもだいたい希望したところに入れていようです。大学院生は常時6～7人がおります。研究レベルはけっして他大学にひけをとらないものと自負しております。毎年、建築学会への論文などは環境設備系だけで20篇を越えていると思います。空気調和衛生学会などでは、かつて総論文数の1割もが本学の出身者だったこともありました。

中島研究室では太陽熱と蓄熱槽の研究、宇田川研究室では

シミュレーションを主軸に住宅関係の設備と太陽エネルギー、大橋研究室は八王子の実験棟をしようして太陽熱ヒートポンプや太陽熱床暖房の研究をされています。足立研究室は音響に関する研究、水野研究室はコジェネレーションやオフィスの環境、屋外局所暖房などの研究を行っております。環境設備系とは、建築と機械の中間だといえるかもしれません。

(談／文責編集部)

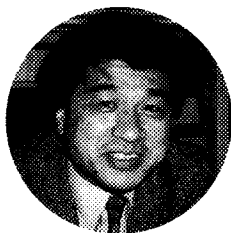


水野研究室による札幌での「屋外局所暖房」の実験

建築学コース 生産系

工学院大学建築学科教授

吉田 倬郎



工学院大学に計画、構造、生産、環境設備の4コース制が設けられたのは1972年のカリキュラムからでした。当時としては他大学に先んじた進んだカリキュラムでした。しかし、私がお世話になっている生産系についていえば、当初は構造系の軒下を借りなければ必要な単位が取れない状態で、4コース制とはいっても不完全なものでした。私が今泉先生と一緒に生産系教員として工学院大学に参ったのは1978年でした。亡くなられた武藤章先生が「これからの建築は生産面が重要になるので、本学の建築学科もそれに対応した教育研究の充実を図りたい」と語ってくださったのが今でも印象に残っています。

その後、カリキュラムの改訂を機に、生産系科目も若干増やしていただき、またカリキュラム全体としてコースに関わる条件が緩くなったこともあり、生産系に進んだ学生諸君もコースに関わる条件については生産系科目だけで対応できるようになりました。しかし、教員の陣容は以前からの難波先生に今泉先生と私に加わった3人だけで、他の3系に比べていかにも手薄な状態が続いてきており、生産系を志望する学生諸君や生産系の学生を求めてくださる社会に対し、少々肩身の狭い思いをし続けてきております。その間、幸いにも教授として橋本先生、白山先生、古川先生を一定期間お迎えできたことは、授業面の充実に大きな効果があったといえます。昨年4月には京都大学から若い遠藤先生を迎え、生産系にとってはもとより建築学科全体にとってもよい刺激になることといえましょう。

社会の建築活動に目を向けますと、設計や施工の専門分化が進む一方で、ひとつの建物が構想されてから設計・施工を経て使用され、やがて除却されるまでのライフサイクル

全体を捉える視点、またそうしたことに関わる組織のあり方に関する視点が注目されてきています。このような総合的な視点こそ、これからの日本の建築活動の方向を考えるうえで重要といえるでしょう。生産系では、専門を深める一方でこのような総合的な視点の養成も重視しています。建設会社、住宅会社、設計事務所といったオーソドックスな建築関係の職域に加え、最近では建材メーカー、ビルメンテナンス、不動産関係、ジャーナリズムなど、建築出身者の活躍が期待される職域も広がりつつあります。卒業生の皆さんには、専門を活かすとともに総合的な視野をもって、大いに頑張してほしいと思います。

今年、長年工学院大学教授として学内外で活躍されてこられた今泉先生が定年退職されることとなりました。現在なお建築関係の要職を勤めておいでの先生ですから、今後とも工学院大学のことをよろしく願いたいと思っています。また今年1月には名誉教授の吉田辰夫先生が長寿を全うされ89歳でお亡くなりになりました。つい先日までお元気で学科の催しにもお顔をを出してくださっていたのですが、ご冥福をお祈りいたします。

大学院建築学専攻

工学院大学建築学科教授
荻原 正三

ここ数年、本学に限らず多くの大学が大学院に重点を置くという方向に変わってきています。特に国立大学、かつての帝国大学と呼ばれていた拠点校の大学は「大学院大学」として大学院を基礎に、大学院の先生が学部を教えるというように変わりつつあります。私立大学もいち早くそういった体制にのれるかどうか重要な点だと思います。最近の受験生は国立指向が強くなっています。その国立大学が大学院重視を行っているわけですから、それと対抗するためにも、私立大学でも大学院大学へとシフトしていかねばならないでしょう。本学の場合、新宿という立地から考えても、大学院大学への変身は必至のことでしょうから、早いうちからの体制づくりが重要になるでしょう。だいたいこれから数年が本学のターニングポイントだといえるでしょう。

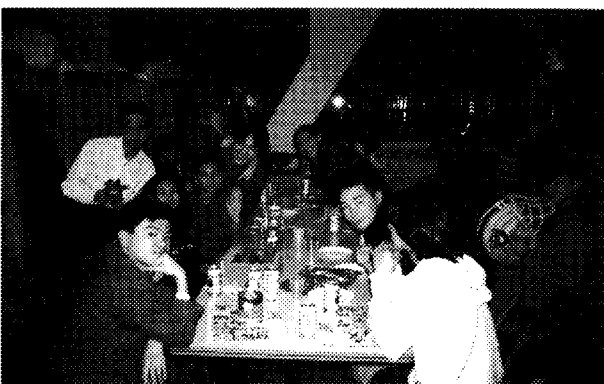
昨年の大学院建築学専攻の入学者数は35名でした。平成3年ごろから急に増えております。今年は現時点ですでに50名が入学を決めており、それ以外に国費留学生などがこの後決まってくるから、もっとその数は増えるでしょう。その理由として、ひとつには不景気だということがあります。また景気が悪くなれば、企業側も数多くの学生をとるよりも、よりよい学生を少数入れるということになります。特に設計の方面では、修士課程を修了していないと相手にしてもらえないような面も見えはじめています。

本学では現在、大学院の専攻で情報学専攻を申請しております。これが平成5年度にできた後、建築学の専攻をふたつにわけて都市建築デザイン専攻と建築学専攻というようにし、定員をふたつあわせて50人から60人程度に増やしたいと考えております。これから文部省へと申請を行わなくてはなりません、建築学科としてはほぼその方向でままりつつあります。

設備面でも、いままでは学部におんぶしていたような状況の大学院でしたが、これからはスペース的にも設備的にも充実を図っていくと考えています。新宿校舎と八王子校舎というふたつのキャンパスをもつ本学としては、将来的に新宿校舎が大学院主体の大学となっていくでしょう。平成5年度からは新宿校舎21階に大学院専用の設計室を設け、ひとりひとつのブースで設計ができるようにしました。またA0対応の大型コピーやカラーコピーなどの設備面でのバックアップも行っております。

平成6年度から「工学院大学総合研究所」がスタートする予定です。社会と結び付いた研究活動を積極的に行うもので、建築学科としても協力してやっていきたいと思っております。現在、大学院には中国とカナダからの国費留学生がおります。また、来年度はフィリピンからの留学生を受け入れます。本学の国際化という面でも重要なことだと思います。

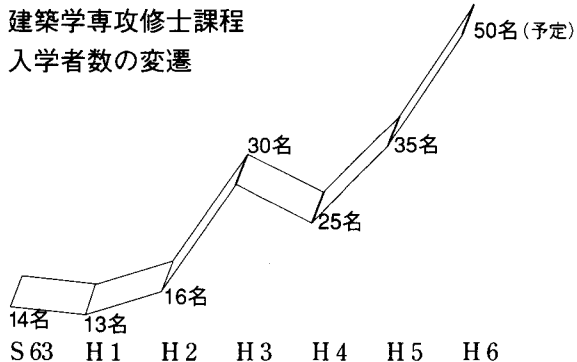
(談/文責編集部)



上/大学院生にはひとりずつ製図台のあるブースが与えられるなど、学校側からの積極的なバックアップがある。

下/共用の休憩室でつろぐ大学院生。

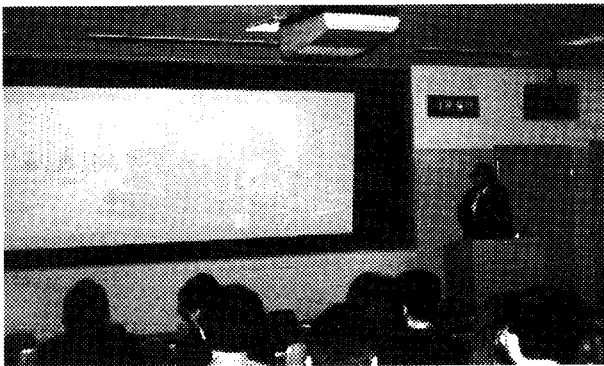
建築学専攻修士課程 入学者数の変遷



建築学科同窓会第28期総会／高橋志保彦氏講演会／同窓会懇親会盛況に開かれる

平成5年6月12日、工学院大学新宿校舎高層棟5階の542号室において、工学院大学建築学科同窓会第28期総会が行われた。60人近い同窓会会員が参加した会場では、会長の高木雅行氏による開会の宣言に続き、第27期年度事業報告、収支決算の承認、第27期年度会計監査報告、第28期年度事業報告、収支予算(案)の承認と滞りなく議事が進められた。総会に引き続き、建築家であり神奈川大学建築学科教授の高橋志保彦氏による講演会が行われた。同氏は横浜・馬車道のまちづくりなどをはじめとして、数多くの街並ぶりに優れた仕事をされており、今回は代表的な作品を軽妙な語り口で紹介していただいた。普段なにげなく歩いている道もデザインひとつで優れたものになると同氏の言葉には、皆引き込まれ、若い同窓生の間では、ぜひ実物を見に行こうという声も聞かれた。

その後、新たに完成した中層棟のレストランに会場を移し、同窓会懇親会が開かれた。予想を上回る220名という出席者の中には、退官された正木三省元教授らの顔も見えた。会場内のいたるところで談笑するシーンが見られ、同じ大学を母校とする者同士のコミュニケーションが世代を越えて行われた。



第29期総会／校友会全国大会・見学会／講演会・懇親会の予定

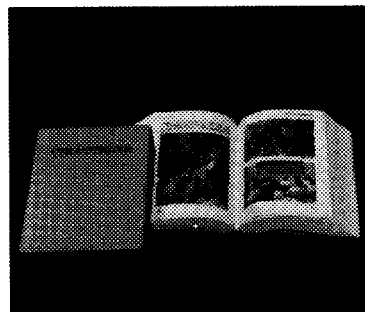
建築学科同窓会第29期総会は平成5年5月29日(日)に開催する予定です。当日は校友会総会も開かれ、総会終了後、校友会主催のパーティーが行われます。

校友会全国大会は10月29日(土)・30日(日)に神戸で開かれる予定です。その際、9月開港予定の関西新空港の見学会なども計画して下ります。

建築学科懇親会・講演会は12月3日(土)に開催する予定です。計画系、技術系の先生がたによる講演会の後、新宿校舎1階アトリウムにて盛大な懇親会を開く予定です。懇親会終了後は各研究室OB会となります。

*いずれも開催日は予定です。会場、時間等の詳細な情報はおってご連絡いたします。

『工学院大学学園百年史』刊行



このほど『工学院大学学園百年史』が完成、刊行された。

この企画は1983年に企画が開始され、10余年の歳月をかけてまとめられた。総ページが1,000ページを大冊となった本書は、

学園の歴史や先人の偉業をまとめた単なる歴史を記述した本ではなく、読み込んでいくことによって工学院大学OBとして未来につながる糧となるものといえるだろう。

頒布価格は1冊3,200円(発送費込)。郵便小為替に住所・氏名・卒業年度・学科を記入のうえ下記宛にお申し込みください。

163-91／東京都新宿区西新宿1-24-2

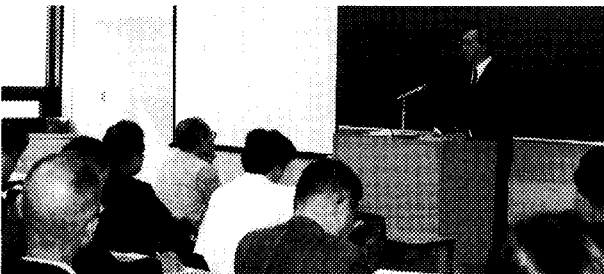
工学院大学企画部調査企画課

生涯学習センター・公開講座開催 熱心な受講者が多数集まる

生涯学習センターの公開講座が、平成4年11月6日（土）、13日（土）、27日（土）の3日間にわたって開催され、熱心な受講者で超満員となった。

生涯学習センターは、共通家庭、機械系・化学系・電気系・建築系の各科の研究成果をわかりやすく興味深い内容で公開し、生涯学習社会に寄与することを目的とするもの。受講生の層は高校生・大学生・大学院生などの学生、会社員・公務員・教員・会社役員・法人役員・建築科などの社会人、主婦など幅広く、中でも40～50歳代の実社会で活躍中の方がたが多いようであった。

建築学科では「すまいを考える」というテーマで初田亨助教授、谷口宗彦助教授、宇田川光弘教授が講座を受け持った。いずれも定員50名の募集のところ2～3倍もの受講申込みがあり、定員拡大の措置が取られた。



今年も工学院出身者・在籍学生がコンペに多数入賞

「大河原公園及び周辺整備公開設計競技」

特別奨励賞 高木雅行（1982年修士課程修了／SUM建築研究所勤務／建築学科同窓会会長）

『建築文化』懸賞論文『『地方の時代』の建築を問う』

入選（下出賞） 園田邦彦（1971年卒業／ACT建築デザイン事務所主宰）

1993年度支部共通事業日本建築学会設計競技「川のある風景」3等 石川直人（大学院）

第3回DYNAX建築学生・設計大賞'93「風景のなかの家」奨励賞 山本芳郎・朝田志郎・大段博司（大学院）

第5回タキロン国際デザインコンペティション'93「都市の音回廊」

3等 牛山宗隆（大学院）・村田美由紀（4年）・鈴木充孝（3年）

お願い

全国各地でさまざまなコンペに入賞された方がいらっしゃると思いますが、なかなかすべてをフォローすることができません。入賞された方はぜひご連絡ください。アイデアコンペ、実施コンペ、プロポーザルを問いません。

住所、氏名、卒業年度、勤務先を明記のうえ以下の資料を建築学科同窓会までお送りください。

コンペ名称、審査員、主催者名称、締切り日、応募総数、応募作品の複写（写真等）

「工学院大学学園所蔵美術品展」開催される

平成5年12月20日（月）から4日間、エステック情報ビルのギャラリー・クリスタルスポットで『工学院大学学園百年史』の刊行記念および同ギャラリーのオープンを記念して「工学院大学所蔵美術品展」が開催された。大学関係者だけではなくエステック情報ビル入居企業の社員、一般社会人が絵画をはじめとする美術品を鑑賞した。

建築学科教員異動

建築学科教員の異動が発表された。

(1994年3月10日現在)

<昇格>

安原治機講師……助教授に昇格

近藤龍哉助手……実験講師に昇格

<新任(1994年4月1日付)>

計画系兼任講師

構造系兼任講師

池 浩三

茶谷 文雄

加藤 常雄

樋口 久吾

高橋 孝栄

田中 栄作

三好 薫

渡戸 一郎

生産系兼任講師

環境系兼任講師

清家 剛

太田 昌孝

田辺誠二郎

黒 幸夫

中山 實

田尻 陸夫

飛坂 基夫

山崎 雄介

吉川 一三

<退職(1994年3月31日付)>

教授

今泉 勝吉(生産系)

兼任講師

金谷 祐二(構造系)

市橋 進(生産系)

吉信 正弘(生産系)

なお、平成6年度の主任教授および幹事、学生主事は以下のとおり。

主任教授 難波教授、廣部教授

幹事 大塚講師、沢岡助教授

八王子幹事 小嶋講師

学生主事 谷口助教授

吉田辰夫名誉教授、大庭常良名誉教授逝去

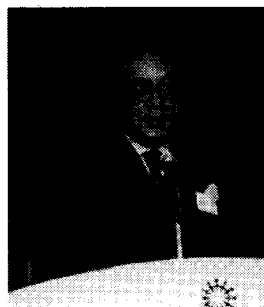
工学院大学名誉教授の吉田辰夫氏が1994年1月28日に逝去された。享年89歳。同氏は昭和37年から昭和47年まで本学



で教鞭を執られていた。また、建築学科創設35周年の際には建築学科と建築学科同窓会より建築学科功労者として感謝状が贈呈されている。

葬儀・告別式は、1994年1月31日東京都杉並区の日本聖公会聖マーガレット教会で執り行われた。

工学院大学名誉教授の大庭常良氏が、1993年6月24日逝去された。享年71歳。同氏は昭和30年に本学に招かれ、同37年に教授として就任して以来、都市計画に関して精力的に



教鞭を執られた。平成4年3月に退官後、1年間大学院の特別教授として教壇に立たれていた。

葬儀は1993年6月26日神奈川県鎌倉市の日本キリスト教団鎌倉雪ノ下教会で執り行われた。

校友・ハナ肇氏逝去

工学院大学校友会東京支部長であったタレントのハナ肇氏(本名/野々山定夫)が1993年9月10日逝去された。享年63歳。同氏は本学園(旧工学院)のOB。本学には平成2年度の教養講座講師として招かれたこともある。

葬儀・告別式は1993年9月14日、東京都新宿区の千日谷会堂において執り行われた。



都心での再開発／工学院大学 新宿テクノキャンパス

—エステック高度情報学園街区
(STEC :Shinjuku Techno Campus)

谷口宗彦 (工学院大学建築学科助教授)

工学院大学の前身である工手学校が1887年(明20)築地に開校し、そのちょうど100年後の1987年(昭和62年)、新宿校地再開発第I期工事(大学高層棟)は着工した。

一昨年の9月に1期工事(中層棟・オフィス棟)が完成し、現在2期工事(地下商店街及び公開空地の広場)の最中である。来春にそれも竣工し、新宿キャンパスは「高度情報学園街区」として生まれ変わる。

1973年(昭和48年)の「学園移転問題」に端を発した再開発論議は、実に20年以上の年月を要し、着工以来9年、建設総工事費だけでも500億円を越える再開発事業として終了する。

1. 再開発に至る経緯

学園将来計画と再開発への準備

1980年(昭和55)、「学園将来計画委員会(役員、評議委員、教職員等、全学による構成)」が開かれ、伊藤鄭爾学長のもとで計画立案について審議した。その条件は「新宿校地という資産は、処分(売却)しない条件方向で検討を進める。ただし、地上権譲渡等はある得る」とした。10年来検討を重ねた学園将来計画は、移転か、八王子結集か、新宿校舎現状改革かというように、主に立地条件の選択が先行して

いたが、ここにきて初めて八王子校舎結集を含む移転案は消滅した。

この年これを実行するために、高山英華氏が理事長として招かれた。この高山理事長、伊藤学長のもとで「都心型大学」という新しいイメージを持った「学園将来計画大綱」が提示された。この骨子は、都心部における新しい学園の基本目標・役割を、註-1のように定めると共に、「新宿本部を動かさず施設・設備は大学の専有とし現状通り1・2年生は八王子、3・4年生と大学院は新宿校舎とし学生は動かさない」というものであった。

このレポートは、後に文部省から「都心におけるひとつの実験校」として新宿校地再開発事業の許可を得る呼び水の役割を果たしている。

しかし当時の本学には、越えなければならない3つの大きな障害があった。ひとつは、大学設置基準による「私立大学の校地面積は、校舎面積の6倍を必要」とし、新宿校舎では大きく不足していることであった。ふたつ目は借金の返済。3つめは、借金に伴う新宿校地の根抵当権の解消であった。

まず、第一の障害である校地制限については、伊藤学長等の各省庁への働きかけもあり、1981年(昭和56)「工場等規制法」の見直しと大学設置基準の問題の一部が改正された。第二、第三の障害となった借金(利息返済を含めて14億円にのぼる)とそれにリンクする抵当権の解消については、厳しい財政抑制策で借入金の完済1987年(昭和62)にこぎつけ解決した。これにより、再開発最大の障害をクリアすることとなったが、昭和3年以来複雑な増改築を繰り返し老朽化した新宿校舎を解体して、再開発に踏み切るという発想に至るには、授業の継続、建設資金の調達など、想像を絶する困難が山積していた。

この間、理事会は日本設計に「工学院大学八王子キャンパス、新宿校舎計画チーム」の編成を依頼し、工学院大学単独開発案の検討を開始した。

都心型学園の構想とKDN委員会

「学園将来計画大綱」の決定後、理事会諮問機関として新たな学園将来計画委員会が組織され、「学園将来計画要綱」の作成に入った。これは新宿校地活用および八王子校舎整備も含み、単に18歳人口の急減期に備えるだけでなく、今後の本学園の向上はもとより、社会との密接な関係についての課題に対して詳細に言及している。この頃、本学の再開発計画を知った新宿校地に隣接するふたつのビルオーナー(2生命保険会社)から、街区一体化計画参加の申し入れがあった。1985年(昭和60)に発足した街区の3地権者によるKDN委員会(K:工学院大学、D:第一生命、N:日本生命の略)は基本計画を固めると同時に経済条件(容積譲度と借地権

設定)について次のように決定した。

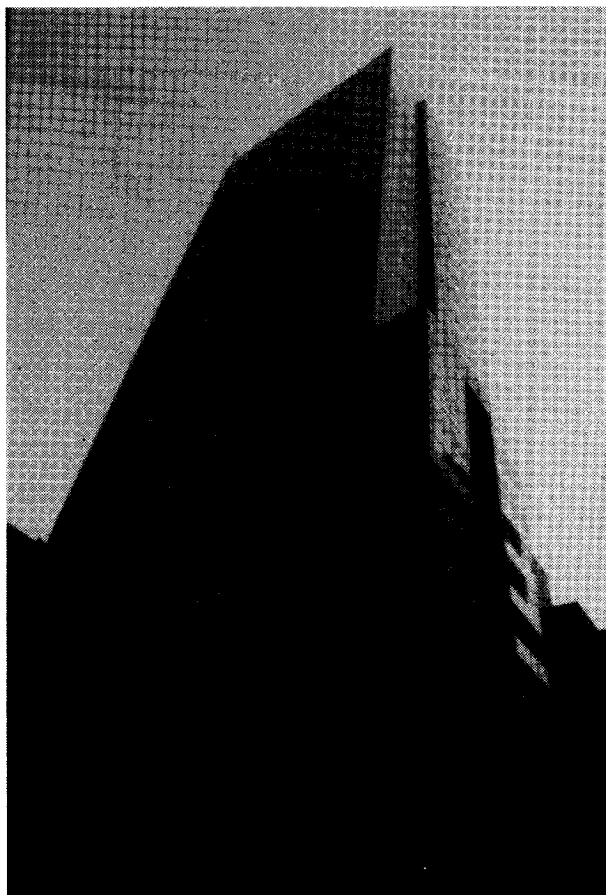
本学が法的に所有できる容積約70,587m²のうち、約14,755m²を生保に売却する。これら「空中権(air right)」の譲渡および借地権を設定。オフィス棟建設に関し生保所有の土地は手狭なため、学園所有地の一部(約690m²)をオフィス棟建設のために貸与することで、合計290億円の費用を本学に支払うことで決着した。同時に、特定街区として共同開発する再開発手法について協議し、註-2のように決定した。

これによって、無借金で学費収入とまったくリンクしない再開発着手が初めて可能になった。しかも、高層化による維持管理費増大に備え、オフィス棟の中に収益権を残すことも考慮している。

2. 高層キャンパスの問題点

1期工事における高層(大学)棟だけでも延床面積30,000m²以上にもなり、対応する旧校舎よりはるかに面積増となる。しかし、基準階面積が約1,000m²(図参照)と小さいビルのため、コア面積が4割も占めてしまった。したがって、廊下面積を除くと有効面積は半分程度と極端に少なくなってしまい、このことが各学科の面積に対する不満となってあらわれた。特に計画上の問題点は、教室を3階から11階までこの超高層の中に入れてため、この間は防災上避難階段を4ヶ所も設ける建築指導があり効率が落ちている。これは、旧校舎の解体面積が「工場等規制法」に縛られ、当時の教室面積2,554m²(授業を継続していくための必要面積でもある)をいったん減らすと、その面積を新校舎で回復できない条件があった。したがって、新宿校地内で仮設教室を目いっぱい設けつつ、その面積を維持できるぎりぎりの解体面積の中で計画したからである。しかし、何よりも理事会の超高層大学をつくりたいという意志が先行していたことが、最大の理由であったのではなからうか。

1期着工後、松浦雄雄開発本部長のもとに新たに再編された「再開発本部」は、1期の計画内容(構造変更はこの時点では不可能で、機能配置変更のみ)を含む2期、3期工事の見直しと積算の減額調整を行った。専門学校の入る中層棟の階段面積、高層棟との接続廊下など利用頻度の少ない床面積を容積対象からはずした。重装備の実験室やそれを維持するための関連設備等の撤去を行うために、教育研究体制の変更をとりまとめ、八王子校地にその手当を講じた。これらの学内世論をまとめる作業を進めることで工費削減と、使用可能な床面積を増やした。他にも中層棟(専門学校・大学図書館・食堂など)6階を8階建てに増やす工夫をしたり、当初の計画にはなかった5層吹き抜けの大アトリウムも、都心型大学としての新しいキャンパスの概念として計画変更によって完成したものである。

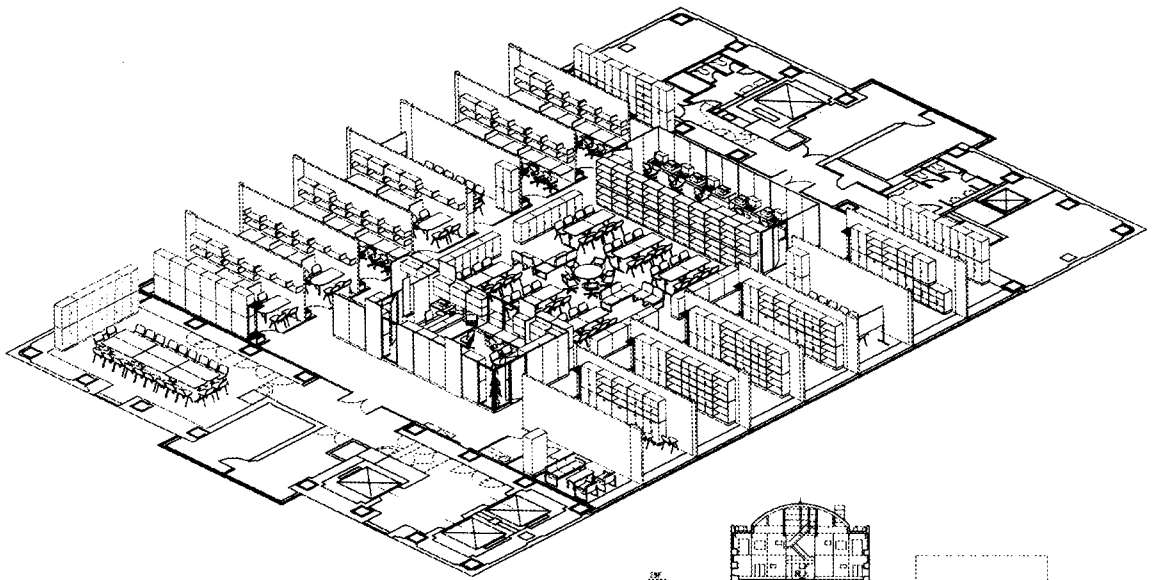


高層化された中での生活は、エレベータによる移動が中心となるため、人びとのふれ合いが少なくなることが懸念された。したがって、研究室階では各研究室の単位面積を最小限(3.2m×6.4m)に抑え、2期工事見直しによって生じた増加面積を各学科に追加配分し、各研究室階の中央部をラウンジ形式にした。専用廊下を取らず学生たちの「学習ラウンジ」とし、勉学と交流の場として改善されている。これも面積不足から生じた苦肉の策ではあったが、閉鎖的になりがちな研究室での活動がこのラウンジと一体化し、開放的で融通性を残しながらコミュニケーションを良くすることができた。怪我の功名といえるかもしれない。

ともあれ、インテリジェント化した「超高層キャンパス」という世界初の試みは、そのシンボル性も伴いそれなりのイメージ向上の成果はあった。

3. 学内合意形成過程の反省

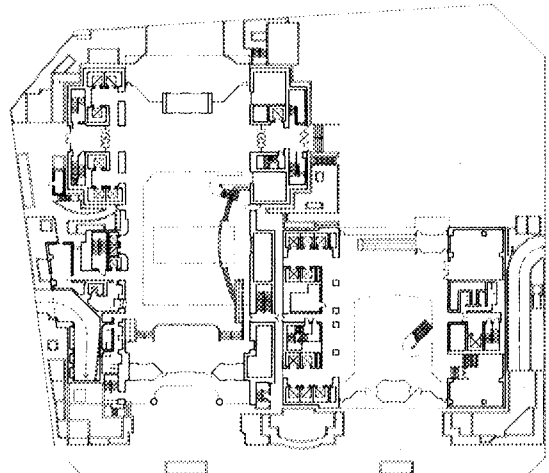
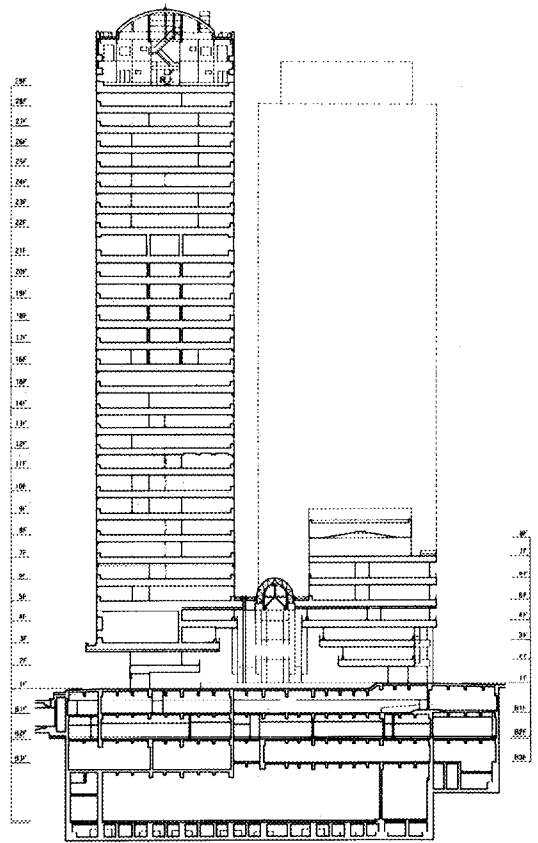
1986年(昭和61)この再開発計画案が公表された時、学内の議論にはわかに活発化した。単独開発、土地信託方式などの代替案の検討結果が理事会から報告されたが、これらはいずれも問題がある旨説明があった。この説明に、教授総会メンバーからは、「配置計画(公開空地が北側にあり、大学棟の正面にない)および基準階面積の大きさに伴う教育、



研究スペースの有効床面積に問題がある」との意見が出された。特に、手続きや企業との共同開発に不安を感じ、その点に議論が集中した。理事会および理事会直属の「再開発本部」の動きを独断専行として非難する声があったが、大規模再開発に伴う複雑な法手続きをクリアするためには、論議と手続きを平行に進めざるを得ないという事情があったことも事実であった。

しかし、仮に再開発に踏み切るまでの段階は良しとしても、具体的建築計画の内容に対して、建築学科を含む各科専任教員がまったく疎外されていた状況があったことが不調和を生んでしまった。特定街区という特殊な手法、煩雑な手続きと超高層複合建築の難しさは、対峙した関係ではなかなか短時間に理解し評価できるものではない。本来、学内の各組織代表による「建設委員会」があって、学内の設計条件の調査を行い、組織・運営の改革を含め建築計画上の合意をまとめつつ、学内世論を形成していくことが大切であったろう。こうした要求条件をまとめ、組織事務所に直接指示する民主的体制が、1期工事着工後までなかったことが、大きく混乱した原因と考えられる。

超高層建築という特殊性に加え、大量の学生が出入りすることから、特に高度な安全性が求められた。しかも、都心部にあってその超高層に重装備の化学実験室まで抱える危険性と、その付帯設備による建設費の超過は、教職員の危機感をあおった。これは「教授総会メンバーの数だけ施主がいる・・」と言われる大学計画において、個人・組織のわがままを抑え旧体制の改善を多少とも促すこととなった。しかも皮肉なことにその危機感は、それまでになかった「全学をひとつとする共同体意識」を育む結果となり、この混乱のもう一方の重要な成果であったともいえよう。



註-1

学園将来計画大綱(概要)

1. 基本目標

a) 将来計画の基本目標は、教育・研究・サービスの機関としての学園の質的向上をはかり、私学としての特色ある独自の学園を作ることである。(ここでいう「サービス」とは、「教員が地域社会の住民、国際社会、行政機関、企業などに対して行う専門家としての社会的義務に基づく活動」を指す)。

b) 本大綱は、この基本目標を達成するための長期計画のうち10年先を見込んだ第一期計画として位置づけられる。

2. 学園の将来像

a) 都心部の持つ知的活動、特に知識集約産業の基礎となる情報の中心地としての特別機能を、意識的、積極的に利用した学園の在り方としての「都市型を象徴とする学園」を目指す。

b) 大学院、大学学部(第1部・第2部)、高等学校および専門学校(昼間部、夜間部)は相互に有機的関連を持たせ、独自の性格を持った学園の構成要素にふさわしい体質改善をはかる。

3. 生涯教育事業

高等生涯教育をはじめとする新しい事業を組織的にを行い、社会的ニーズに応え、あわせて事業収益を図る。

4. 校地と校舎

a) 八王子校地の校舎では整備・拡充を実施し、新宿校地は再開発して都心部に位置していることに基づき新しい施設を建設する。

b) 新宿校地の再開発は学園本部を動かさずに行い、新宿校地の現有設備のうち、総合見地から八王子校舎の方を可とするものは、八王子校舎に移す。

5. 建設の財源

八王子校地の整備、拡充と新宿校地の再開発に要する費用は分別経理し、それぞれの収支を明確にする。

6. 事業体制

絶えず業務体制の見直しを行い、学園の教育・研究・サービス活動を支援する体制としての事務部門における生産性の向上を図る。

7. 計画の期間

本大綱における学園の新体制は、1992年(昭和67)以内に確立され機能していなければならない。

註-2

「新宿校地再開発の手法」の概要

(1985年KDN委員会において決定した協議内容を、1993年現在の状況をふまえて谷口が一部加筆修正したもの)

1. 特定街区

新宿校地再開発計画案は、本学と第一生命、日本生命および個人の4地権者の敷地を特定街区として開発する。〈わずかであるが個人所有地があり、その個人地権者は権利を隣接地権者に一任した〉

a) 高層棟(大学棟)建設のために新宿校舎の一部を解体する。

b) 大学所有地の一部に借地権を設定する。〈余裕敷地による資金づくり〉

c) 現3地権者の所有地(面積536m²)とオフィス棟建設予定地の本学所有地東南区域(同面積)との土地を交換する。〈所有建物と敷地形態の整理〉

d) 容積率については前述した通りだが、公開空地と公益施設(地域冷暖房プラント:DHC)を取り入れることによって、容積率を1,000%から法的に1,120%に増加させる。〈日本最大級の容積を獲得〉

e) 開発後建物の維持管理費を捻出するための公益事業を行う。〈オフィス棟の中に収益権を残す〉

f) 大規模建築物となるため、都条例により一定台数の駐車場を法規上設置(付置義務台数264台)しなければならない。

2. 都市計画審議会

この計画書は、昭和61年9月から10月に開催される予定の東京都都市計画審議会にかける。

3. 特定街区の敷地内に建てられる建物の床面積

登記簿上の敷地面積 8,880 m² × 1,120 % = 9,9456 m²(容積対象床面積) < 10万m²を越えると環境アセスメントを求められることから10万m²以下に抑える。また、東京都の指導により、大気汚染防止法のため地域冷暖房設備(公益施設DHC)を入れる。これは認可事項ではないが、促進地域に指定(国土庁)されているから設置せざるを得ない〉

建設される建物

高層棟(大学棟) :	高さ127.8m・29階建
オフィス棟(テナントビル) :	高さ111.0m・28階建
中層棟(専門学校・食堂・体育室) :	6階建
	〈後に8階建に変更〉

4. 建物内ゾーニング

人・車の動線と量、防災、建築構造を考慮し、大学棟は地下6、5、4階に地域冷暖房プラント、同3階に駐車場、同2、1階に厚生施設及び実験室

5. 新宿再開発のタイムスケジュール

1986年(昭和61)7月/3地権者と共同事業の基本契約を締結、仮設教室の増設

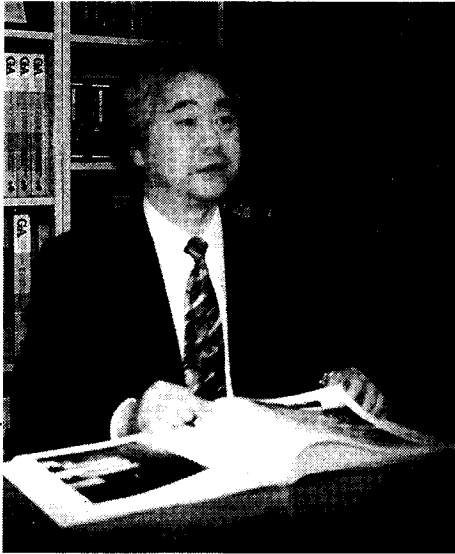
1987年(昭和62)4月/大学棟解体工事着工 <ただし、都市計画審議会の承認と建築確認許可申請書の許可が得られないと解体着工できない〉

1989年(平成元)8月/大学棟竣工、残りの大学校舎解体

1990年(平成2) / オフィス棟、中層棟着工(第2期工事)

1992年(平成4)9月/ オフィス棟、中層棟竣工、2生保ビル解体

1994年(平成6年)12月/ 地下および公開空地の広場完成(第3期工事)



秋元敏雄氏に聞く

あきもと・としお

1965年3月 工学院大学建築学科卒業
1965年4月 I.N.A.新建築研究所入所
1967年8月 同所退所
1967年9月 カトー建築事務所入所
1970年2月 同所退所
1970年5月 川島甲士建築設計研究所入所
1973年7月 同所退所
1973年7月 山下設計入社
1978年3月 同所退社
1979年2月 建築設計工房を設立 現在に至る

受賞・入選作品

1965年 日本建築センター展示場設計競技優秀作品
1968年 四街道庁舎指名設計競技入選・実施（カトー建築事務所にて担当）
1968年 箱根町庁舎指名設計競技入選・実施（カトー建築事務所にて担当）
1970年 第5回セントラル硝子建築設計競技入選
1971年 第6回セントラル硝子建築設計競技入選
1971年 石綿スレート使用住宅設計競技入選・アイデア賞
1972年 大泉町庁舎指名設計競技入選・実施（川島甲士建築研究所にて担当）
1973年 第8回セントラル硝子建築設計競技入選
1974年 第1回日新工業建築設計競技入選
1978年 読売新聞社住宅設計競技コンクール入選
1983年 第2回ホクストン建築デザインコンクール入選
1989年 川口市より都市デザイン賞受賞
1990年 住友金属鉱山住宅指名設計コンペ1等入選
1991年 埼玉県よりさいたま景観特別賞受賞
1992年 建築士会主催ヤクルト独身寮公開建築設計競技優秀賞・実施

本日はお忙しいところ、お時間を割いていただきまして、たいへんありがとうございます。この「同窓生を訪ねて」の第2回、「先輩を訪ねて」から数えますと第9回目の今回は昨年行われた「ヤクルト独身寮公開設計競技」で1等に入選されいよいよ着工したというところまでたいへんお忙しい秋元敏雄さんにご登場ねがうこととなりました。どうぞよろしくお願いたします。

●私でいいのか心配ですが、何からお話ししましょうか。

最近のお仕事の話から遡っていただいてもけっこうですし、逆に学生時代の思い出からでもかまいませんが。

●学生時代といいましてもね、はたして覚えているかどうか（笑）。

劇画の世界から建築の世界へ

まず、どうして建築の学校に入られたのですか。

●私が高校のときにちょうど劇画ブームというのがあったんです。当初は趣味でしたが高校2・3年くらいから本格的に劇画を描きはじめてんです。当時貸本屋を中心として短編の劇画集が流行っていました。最初はそんな本を出している出版社に投稿をはじめまして、だんだんと不定期ではありましたが自分の劇画が本になっていったんです。

建築家のデビューよりも劇画家としてのデビューのほうが早かったんですね。

●そうですね。高校3年くらいにはじめて本に載ったんです。そんな生活をしておりましたが、建築がいいなと思ったのはたいした理由があったわけではなく、建築関係の本を立ち読みしたりしているうちに何となくといったところですよ。

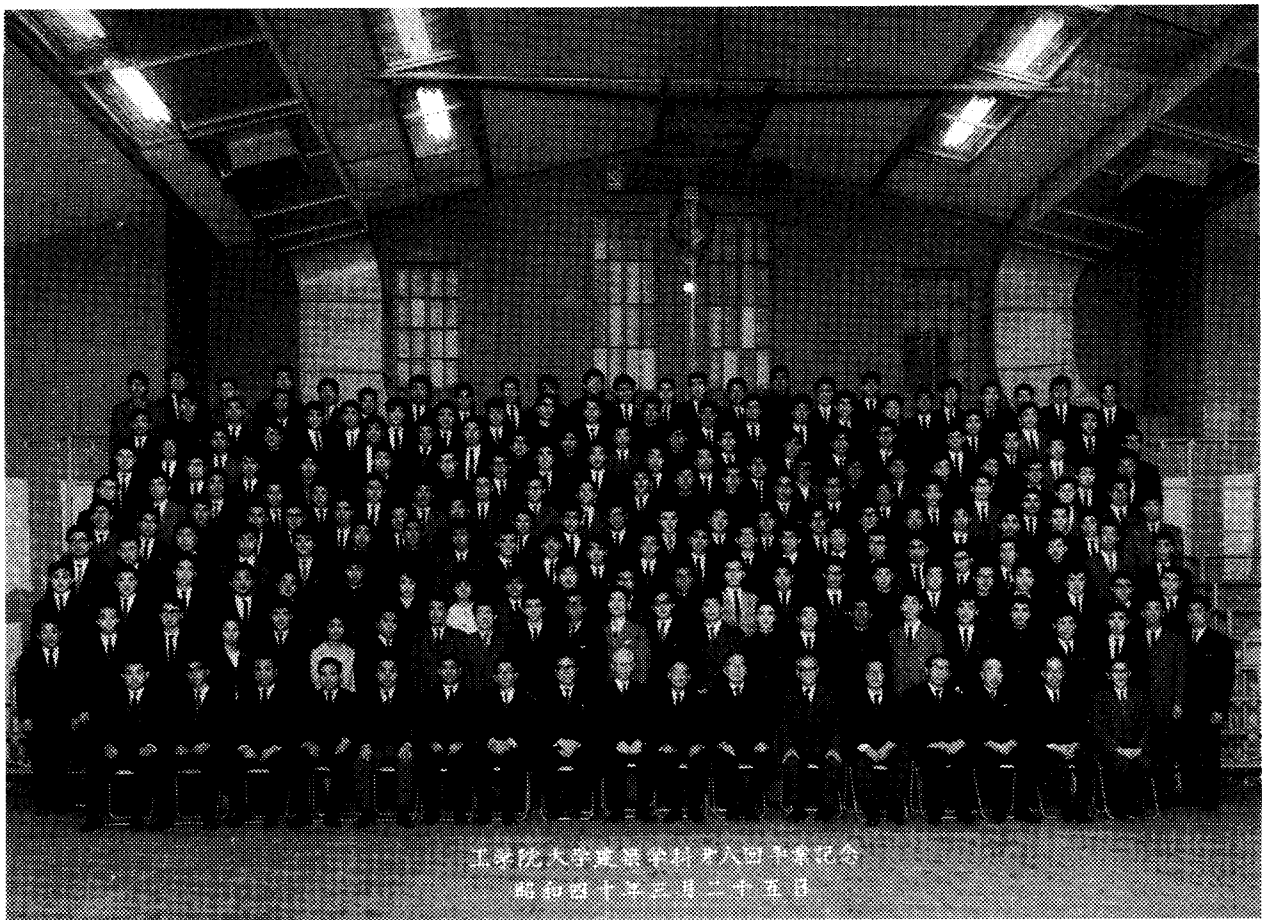
ただテレビが出始めの頃でして、この劇画を出している編集者側も自分たちのメディアに危機感をもっていまして、今でこそテレビでのアニメは全盛ですが、当時は自分たちの仕事がこのまますたれていくのではないかと、大きな危機感をもっていました。そのような状況の中、高校3年のときに兄貴分の編集者から「建築という別の道に興味があるのなら、そっちを選んだほうがいい」とアドバイスされ、1年間の浪人生活の末、工学院大学に入学したわけです。

劇画が今の建築に役だっている点はある点ですか。たとえばスケッチですとか。

●役だっている部分はあるかもしれませんが、あらためて考えたことはありませんが（笑）。

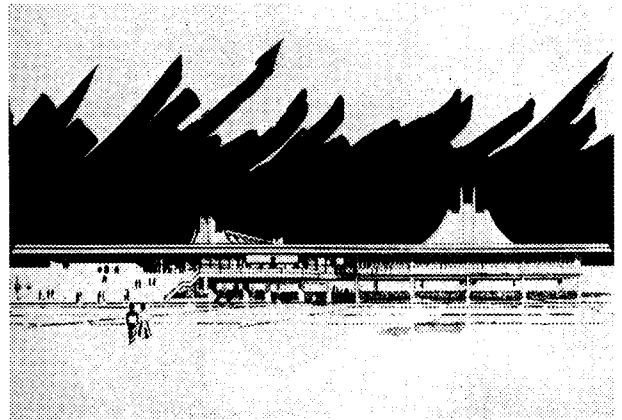
秋元さん自身はどんな学生だったとお考えですか。

●授業にあまり出ないタイプの学生でした。新宿という、



工学院大学設計学科八田平彦記念
昭和四十年六月二十五日

上／秋元氏の卒業写真。前から4列目、右から9番目が秋元氏。このころ卒業されたかたは懐かしい風景でしょう。
右／秋元氏の卒業設計。みごと銀賞を受賞。



いい場所に学校がありましたから（笑い）。ただ計画系の、それもデザインの授業だけは風邪をひいても徹夜しても授業に出ていました。そのぶん他の科目に出ませんでした（笑い）。そんな学生でしたから、成績がよかったのはデザインの科目だけでしたよ。

大学時代で印象に残っているのは、3年のときに大学祭で軽井沢に合宿をしたことですね。1週間くらい雑魚寝で友人と生活をともにしたというのは、それまでなかった体験で、非常に楽しかったと覚えています。学祭をやるんだというより、みんなといっしょに生活したというのが楽しかったです。そのときにみんなで自転車で遠出をしましてね、

私は自転車から落ちてしまったんです。その傷がいまでも残っていますよ。

デザインの授業だけは欠かさず出席されていたということですが、やはり設計が肌にあったということなんでしょうか。

●そうですね。やはり好きなんです、デザインが。もちろんデザインの方面に進むかたたちは皆そうでしょうかね。

当時はどのような先生がたがいらっしゃったんですか。

●天野太郎先生が工学院をやめられた後、波田江健郎先生、

武藤章先生、山下司先生、荻原正三先生らがいらっしゃいました。荻原先生は病院を中心にした公共建築の計画、あとの三先生はそれぞれ海外の建築家に師事したということもありまして、先生がたを通してフランク・ロイド・ライト、アルヴァ・アアルト、ポール・ルドルフといった建築家のエッセンスを受けられました。当時は今のようにジャーナリズムから影響を受けるといよりも、学校の先生がたを通してその師事された建築家の影響を受けるとい時代でしたね。

入学してすぐ計画系に進みたいという希望をもたれたのですか。

●いえ、入学する前からデザインをやりたいと考えていましたから、デザインをやるために工学院に入ったということです。

工学院大学を選ばれた理由はなんですか。

●まあ、数ある大学の中で通学に便利だったということ、後は自分の学力で入れる大学だったということです。

高校時代から劇画を描かれていたということで、他の学生とは違って早い時期から社会とのつきあいがあったかと思いますが、それまで考えておられた学生生活と実際の学生生活のギャップはありませんでしたか。

●特別にありませんでしたね。ただ2年生くらいから小規模の建築のスケッチをやる授業がありまして、毎回の授業で優秀作品を何点かピックアップして先生が批評を加えたんです。そのときは授業でこんなに順列を押し出しているのかと思いましたが、学生のレベルアップのために先生がたが努力されている結果、こういうふうになったと理解をいたしました。最初はびっくりしました。

研究室は武藤研究室ですね。

●はい。武藤先生は学生に対して余計なことをあまりおっしゃらない先生でしたね。4年になって研究室に入りまして、いっしょにスキーに行ったり旅行に行ったり、建築だけでなく生活の面からもわれわれ学生と一体となろうとされていました。卒業してからです。仲人もお願いいたしました。現在、ジャーナリズムの世界では軽やかな建築が主流になっていますが、先生は当時から軽やかな建築とおっしゃっており、私もそれを引きずっているような気がします。「軽やか」というのは、素材とか見た目ではなく、空間そのものが軽やかだということです。羽根のようなふんわりと柔らかい「軽さ」ですね。私だけでなく、武藤研究室の出身者はみな先生から強い影響を受けているでしょうね。

いよいよ卒業設計となったとき、友人たちはみな学校に泊まり込んでやっていたのですが、私は最初から最後までひと

りでやりました。あまり先輩後輩の関係をつくらなかったせいもありました。ですから学生生活で合宿が一番印象深いのかもしませんが（笑）。テーマは「中小企業従業員のための施設」です。敷地は赤羽の荒川沿いです。赤羽あたりですとロケーションのいいのは荒川沿いくらいでしたし（笑）。川の中まで建物が延びていく構成です。住んでいたところが東京都北区の赤羽、京浜工業地帯の末端にあたるところでして、中小企業のたいへん多い場所です。遊びを越えた文化施設として提案いたしました。残念ながら建築的には満足いくものにはなりませんでした。自分たちの生活に密接に関係のあるものでしかもまだ社会的にそれほど取り上げられていないものをやりたかったんです。おかげさまで銀賞をいただきました。

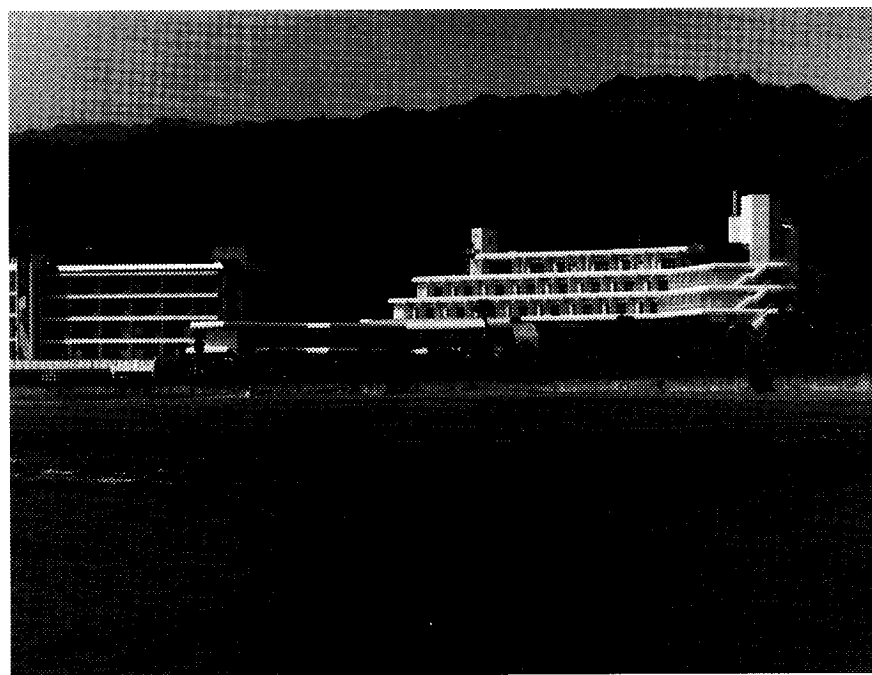
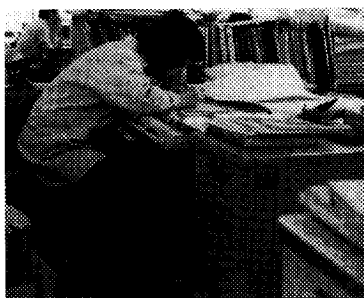
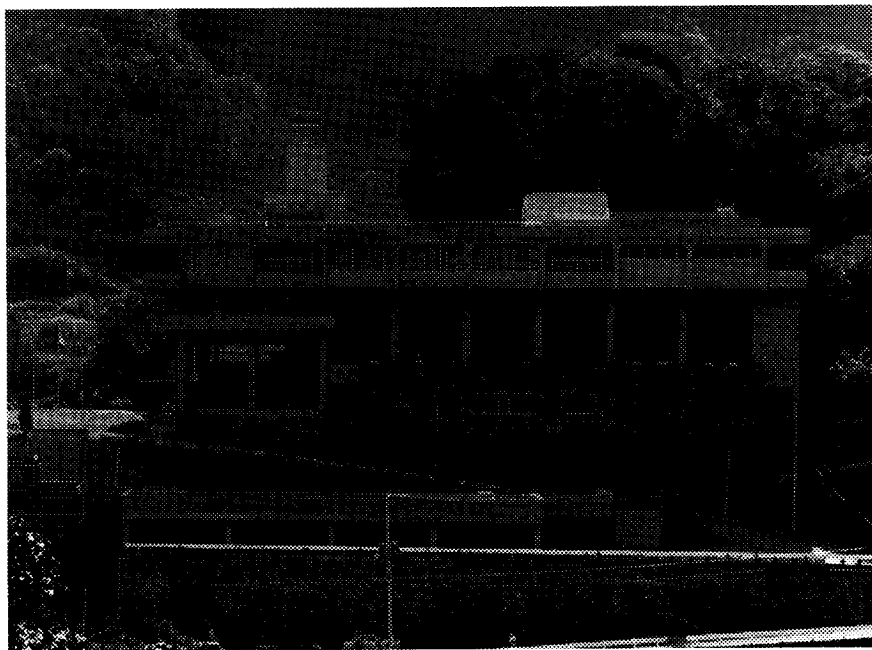
それが今回のヤクルト独身寮のコンペにつながっているのかもしませんね。あれも従業員のための施設ですから（笑）。卒業されてから、すぐに就職されたのですか。

社会へ出て

●卒業してI.N.A.新建築研究所に入所しました。武藤先生のご友人が幹部におられましたし、私の2年先輩が勤めておられました。設計事務所の内容もわからずに、先生の勧めにしたがって入所したわけです。この事務所は軽量鉄骨の開発をしながら出てきた事務所として、八幡製鉄の工場や日本通運の流通施設など、比較的大規模の建築が主体でした。2年半ほどここにおりましたが、もっといろいろな建築を手掛けてみたく、カトー建築事務所という事務所に移りました。ここは公共建築を主体に設計活動を行っている事務所で、日大の構造の加藤さんが親分です。若手が多く、公共建築が主体といってもたいへん自由な雰囲気の仕事所でした。公共建築というと、役所が出してきた案にいかにか肉付けをしていくかといったイメージがありますが、ここではみんなで案を出し合って、役所の案をむしろ事務所の案にきりかえてやるぐらいの熱気がありましたね。

I.N.A.新建築研究所では担当制度ではなかったのですが、カトー建築事務所での初めての担当である千葉の四街道町（現四街道市）の庁舎が初めての担当作品ということになります。引き続き担当しましたのが箱根町庁舎です。いずれもコンペでしたが、箱根町庁舎はコンペの担当で実施は担当していません。

このころある市庁舎を担当したときに、議会説明に出かけたんです。残念ながら模型が間に合いません。パースのパネルなどを持ち込んで説明をしにいったんですが、そのとき「議員の方がたにはわからない方も大勢いらっしゃるでしょうから、次回には模型をもってまいりまして細部にわたってのご説明をさせていただきたいと思います」と申



右上／箱根町庁舎。カトー設計勤務時代に担当した作品(設計競技のみ)。1969年。
右下／宮崎県営国民宿舎 青島。川島建築設計事務所時代に担当した作品。1972年。
左上／山下設計勤務時代。同社が設計を行った養命酒研究所の現場近く。
左下／山下設計勤務時代。

し上げたんです。私としましては「パネルだけではわかりにくいので」という意味で話したのですが、議員のひとりが「議員に対して『わからない』とは何事だ!」と机をパンと叩いて立ち上がられたんです。それで議会も中断しますし、大騒ぎになったんです。今考えれば、建設反対派の議員のかただったんでしょうが、こちらは20代後半ですから冷汗ものでした。幸いにも事なきを得まして無事建物はできあがりしましたが、

その後、川島甲士建築設計研究所に入られたのですね。

●ある展示場で川島先生の市庁舎の模型を拝見し、入所の

希望もっていたところ、川島先生が大学の波田江先生のご友人だということで相談いたしましたところ、ご紹介いただいた所です。

それまで勤めたふたつの事務所に比べ、アトリエ事務所ですからぶんと違った点がありました。良くも悪くもアトリエ派というのはボスの個性が前面に出てきます。川島先生の場合、クライアントから2日以内に案を出してほしいなどという要望がありますとふたつ返事で引き受けてしまうような非常に情熱的なかたですからスタッフはたいへんでした(笑)。2日間寝ないでやるのですが、その2日間でも簡単なアイデアスケッチ程度のものではなく基本

設計に近いものを出すのをモットーにされていましたのでたいへんでしたね。ここでは住宅から商業施設までいろいろな建築を担当しましたが、代表的な担当作品は宮崎県営国民宿舎ですかね。

川島さんから受けた影響というのはいかがですか。

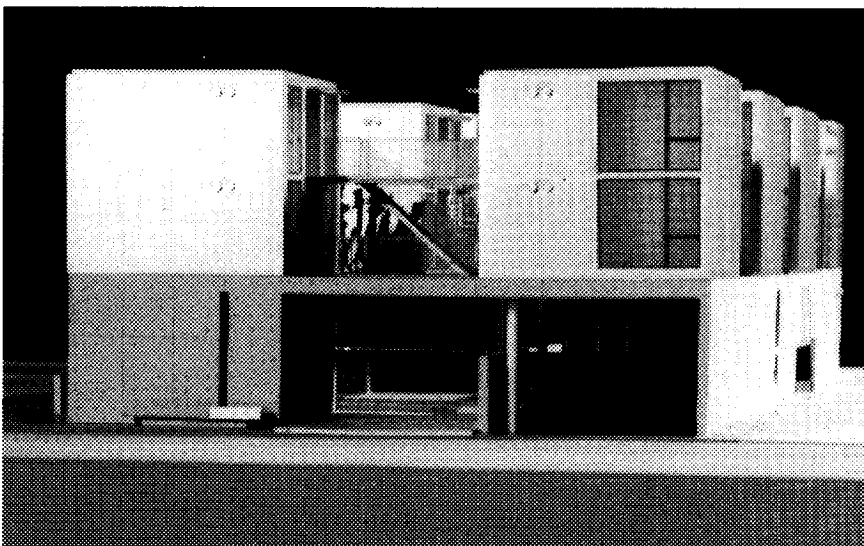
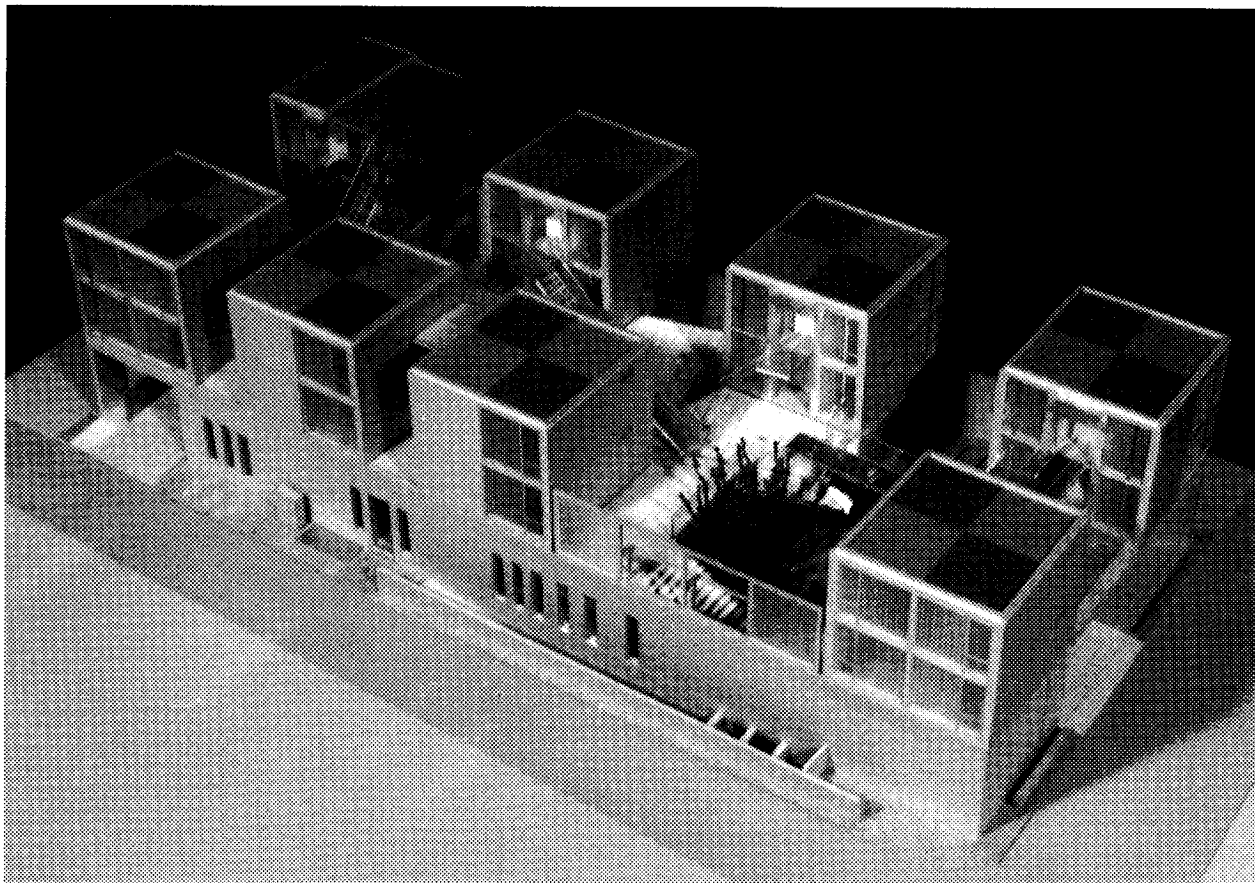
●川島先生というかたは非常に情熱的なかたです。「後に

残さず今やれ！」という姿勢は影響が大きかったですね。

独立して

そして山下設計に入れ、その後独立されるわけですね。

●2日で案をつくるのがしんどかったというわけではありません（笑い）。川島先生の事務所で私が最年長になりつつありまして、たまたま紹介して下さるかたがおりまし



公開設計競技で実施を勝ち取ったヤクルト独身寮が今年1月に着工。

て山下設計に入社いたしました。アトリエ派の事務所にしたものですから、組織事務所に興味も湧いてまいりましたし、ちょうど霞が関ビルができたところでそういう建築に技術的な面からも興味が出たということです。

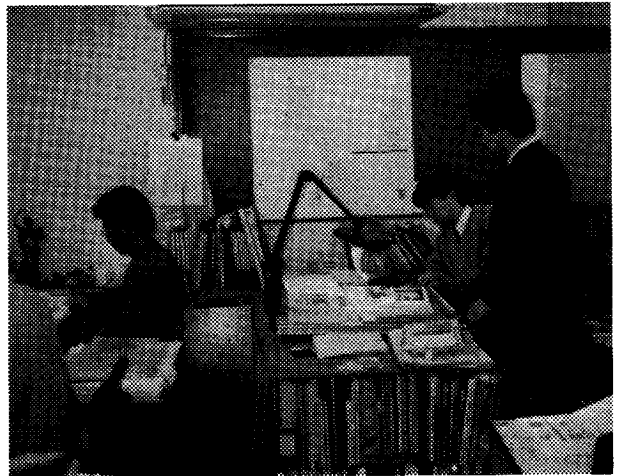
山下設計を退社したのは仕事のあてがあったからというわけではありませんでした。当時、帝国ホテルの設計を山下設計がやることになりまして、オーナーのほうからの要望で超高層の経験のある人間をチーフとして出してほしいということで、大阪の設計部長を呼ぶことになり、その代わりに私が大阪へ行くことになったんです。管理職として異動するのですから、どちらかといえば設計をやるというよりはスタッフをまとめる立場でいくわけです。組織ですから、好きな設計ができなくなるから異動したくないなどというわがままは通用しません。そんなわけで急遽独立したかたちになってしまいました。ですから1~2年は仕事もありませんでした。国内外の建築を見に行ったりしてぶらぶらしていましたら、あまりにかわいそうじゃないかといって知人が仕事をくれました。分譲マンションの設計でした。それが現在の事務所に近い場所で、今でも東京の城北地区、豊島・北・練馬・文京・千代田あたりの仕事は多く手掛けています。内容的には貸事務所、共同住宅、専用住宅、商業施設、ホテルなどで、主流は共同住宅ですね。

設計実務とコンペ

経歴書を見ますと、ヤクルト独身寮のコンペをはじめとして、ずいぶんコンペで入賞されていますね。それにコンペ以外の表彰も多いですね。

●おかげさまで、コンペにはよく入選させていただいております。実務としての設計では自分の思いとのズレが大きく感じられた時期がありまして、自分自身が出せるという意味でアイデアコンペも数多くチャレンジしています。ヤクルトの場合はラッキーだったというものもありますが、自分たちが普段やっている仕事で「住まい」を中心としたものであるということ、敷地が東京であるということ、規模などの条件から取り組みやすかったという点がありますね。ですから珍しくあまり悩まずに一気にやれたコンペでした。自分のスタディが2週間くらい、スタッフとともに模型制作やドローイングに約2週間くらいで合計1カ月くらいで仕上げました。

規模からいってもみなさんがタッチしやすいコンペでしたからね。800強の作品が集まったというのは驚きでしたね。ただ出す側としては心配もありました。たしかに審査員は建築の専門のかたですから建築的な評価は間違いのないところでしょうが、最終的に3案の中からオーナーが実施案を選ぶコンペでした。これが公共の建物でしたらそれほど問題はないのですが、民間の会社がオーナーというこ



事務所でスタッフに絶えず声をかけながら設計が進む。

とで、当然そこにはその会社の意志とか姿勢が関係してきます。それが建築の専門的な部分とどのようにずれてくるのか不安でした。最終案に残った竹中工務店も石田敏明さんもそのような不安をもっていたと思いますよ。

今年1月に着工したのですが、クライアントを公募するという形態のコンペははじめての試みですから、ぜひともいいかたちで仕上がってほしいものです。

現在は年間にどれくらいの作品を手掛けられていらっしゃるんですか。

●年間に12~3件が平均ですかね。その中には住宅もありますし、商業施設もありといった大小まぜての話ですが。

スタッフは何人いらっしゃるんですか。

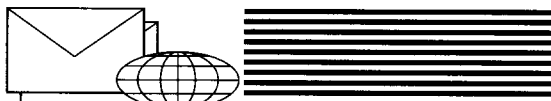
●私を含めて6人の小さな事務所です。だいたいひとりずつ2~3件の現場を担当するという計算ですかね。まあ、忙しくもなく暇でもないといった状況です。パブルがはじめて私どもの事務所では3割減くらいのダメージを受けています。この2年間くらいそういう状況ですね。

所員のかたは工学院出身者が多いのですか。

●千葉大がふたりと東洋大がひとり、あと私が教えに行っていた関係で中央工学校がふたりです。インタビューもしていただきましたし、これから工学院にも門戸を開放しなくてはなりませんね(笑)。

お忙しいところ長時間にわたってありがとうございました。最後にこれからの抱負をお聞かせください。

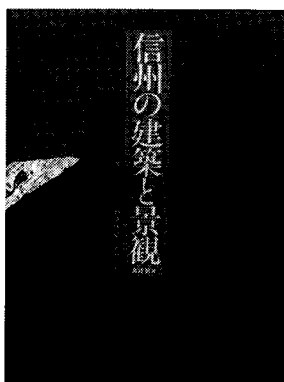
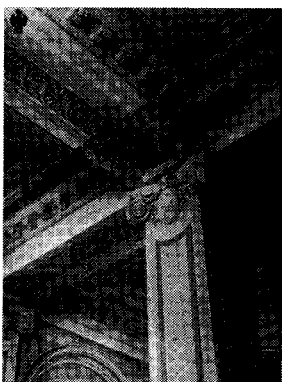
●そうですね。これからもできるかぎり、設計の実務と並行してコンペにもチャレンジしていきたいと考えています。今日はどうもご苦労さまでした。



同窓生からの便り

クッセツ20年

伊藤真人 (1968年度卒業／新建築社企画編集部勤務)



(上) 荒川修作氏(左)にインタビューする伊藤氏(右)。ムズかしい話に頭の中が腸捻転を起こし視線がウツロになっている——本人談。

(下2点) 最近伊藤氏が編集担当をした本。

「京都大学卒業後、東京大学大学院」「東京芸術大学卒業後、ローマ大学留学」「早稲田大学卒業後、エコール・ド・ボザール留学」

——こんな連中と毎日毎日、しかも20年に渡ってつきあってきた「工学院大学卒業後、留学なし」の男のココロがいかにばかりか、お分かりいただけるでしょうか。

私が、母校が引き止めるにもかかわらず逃げるようにして卒業し、もちろん大学院にも行かなければ留学にも行かないで、ある建築雑誌の出版社に入社して満20年を数えました。

建築意匠の、つまりデザインの世界、さらにいえば創作の世界は、実力が地位と名誉とお金を運んでくれます。学歴は無用です。そんなことは、他人にいわれるまでもなく、芸大を落ち、早大を落ち、日大を落ち、わが母校へ進む紆余曲折の間に、次第に肥大し硬質になり、早い話が信念になっていました。そうよ、学校が何なのサ!

もうご推察のとおり、正真正銘、頭の先から爪の先までのスカタンな男が、冒頭のようなハイソサエティが鈴なりしている世界に飛び込んでしまったのですから、これを悲劇と呼ぶはずして、何と呼ぶのでしょうか。喜劇?この状況をギャグにしては、それこそ本人がかわいそうすぎますよ。

あるとき、こんなことがありました。巨匠といわれる建築家を、若い建築家と建築史家が訪ねるシリーズがあり、私に担当がまわってきました。巨匠は、別に意識もせず息を吐くがごとくに「東京大学卒業後、ハーバード大学大学院留学」であり、若き建築家は別にいきばりもせずに屁をひるように「東京大学卒業後、同大学大学院、イエール大学大学院留学」であり、建築史家は別に履歴書をいたがなくともその白い冷たい横顔に「東京大学」が貼りついていて新進気鋭の学者でした。さらに不孝なことには、若き建築家は私のヒトツ上、その建築史家は同い年なのでした。このふたりが、巨匠にいろいろ伺い、後で原稿にして、巨匠論を軸に現代建築の地平を語るというわけです。

——じゃあ、お前は一体何をやるのだと、イブかしく思われるのは当然です。私は、その依頼原稿と、当社の写真部の撮影した巨匠の設計による建築の写真を組み合わせてページを構成する、すなわちレイアウトをするんです(それはグラフィック・デザイナーの仕事だろ)。そんなヤツ、うちにはいません。まだあるぞ。原稿が印刷所から打ち上がったってきたら、すなわちゲラというのを校正するんです(そんなの校正マンの仕事だろ)。そんなのうちにいないんだってば。——というわけで編集者とは名ばかりの、周辺仕事のほうが多い。まァ、巨匠を若手ふたりが訪ねるといって鋭く面白い企画を考えたところに編集者らしい輝きがあるけれども、これとて早稲田大学の学部をふたつもコナした編集長の意向。「取材」だからといわれたって、これ

じゃ金魚のフンじゃありませんか。

さて、2時間半ばかりの「取材」が終わりました。畳を敷いたら15畳にはなりそうな所長室の、その部屋の主である巨匠の背後のブラインドが紅く染まっています。その夕焼けを見つめながら、くだんの大建築家、こういったのです。「そうだ、これから同窓会にしようや。ああ、今日は愉快だ」。紅い視線が振り返り、私を射りました。刹那——。「私は、まだちょっと仕事が残っておりますので、失礼させていただきます。今日は、どうもありがとございました」——私のこの呻きは、シェイクスピアがハムレットに与えたとの台詞よりも魂を揺さぶると思いませんか。よく考えてみれば、この部屋の2時間半あまりで、これが私が放った最初で最後の台詞でした。

新宿は西口、小便横丁で呑むビールの苦かったこと。涙か鼻水が入っていたのかもかもしれません。これじゃ、屈折するわな。

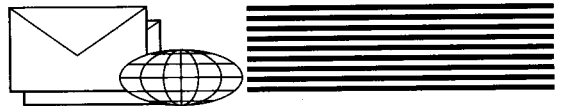
みんな、こんなじゃないだろうというムキもあろうかと思えます。そうです。みんながみんなハイソサエティじゃありません。安藤忠雄は出身校の欄は「独学」ですし、齋藤裕の略歴は「曳家・鳶職などを経て」とあります。でも、なきゃないで、こっちのほうが絶対にカッコいい。私は、自分の、ハッキリいって中途半端な学歴がこんなに重荷に感じたことはありません。

でも、世の中、たしかに事実は小説より奇なりようです。あの絶対を誇ってきた徹頭徹尾の学歴も、なんの効果も示さなくなってきた。しかも、その効能を奪ったのが、わが建築の分野なので、嬉しくなるじゃありませんか。

東京大学を出て、建設省のキャリアを経て、知事をキメこんでいる人がお縄になる時代がきたんですよ。毎日毎日、新聞やテレビを賑わす「ゼネコン疑惑」に、わが身を非難されているような深い苦痛を感じる、その皮膚の裏でもっと深い快感がウズいているのを、私は制御することができません。

情報産業は、送り手が若くないとダメです。肉体も、右の脳も左の脳も、とにかくフレッシュでないと、新しい時代は提供できません。そろそろやってくるリストラの人員整理の前に、私にはやらなければならない仕事があります。雑誌に自分の設計した作品が載るのは別に偉くもなんともないけれども、そりゃあ嬉しいに違いない。わが母校の出身者よ、私が元気うちに、一度でいいから、巻末のプロフィール紹介欄に「工学院大学卒業」を書かせてくれ、レイアウトさせてくれ、校正させてくれ！

クッセツしている私のココロを、どなたか真っ直ぐにしてください。



同窓生からの便り

新潟・上越地区での同窓会

中村好男（1971年度卒業／上越土木事務所建築課勤務）

新潟県はご存じのとおり、日本列島の縮小版のごとく弓なりに長く、経済・文化等何かにつけ上越・中越・下越の3地区に分けられます。

私たち上越地区（上越市を中心に）居住する工学院大学建築学科卒業生は19名おりますが、10年ほど前から1年に1度くらい会合をもって親交を温め、情報交換をしております。職業もバラエティに富んでいて、各方面で活躍されています。

今年は、1月26日に会合をもって楽しい一時を過ごしました。当日は仕事の関係や風邪で体調を崩したりと、全員の参加はなりませんでしたが、10名の参加を得て和気あいいと時間のたつのも忘れて語りあいました。

皆さん、1年に1回の集まりを楽しみにしているようで、次回の参集を約束して散会しました。いつまでも続く回にしたいと、一同願っています。

この会を代表して、近況報告をさせていただくことにしました。同級生の消息がつかめるチャンスになればと思います。



前列左より 橋詰敏一（1982・波多江）、野口昭和（1974・伊藤）、小松輝郎（1968・山崎）

中列左より／中村好男（1971・正木）、高橋伸一（1979・波多江）、木村雅俊（1969・大庭）、石平禎一（1970・正木）

後列左より／茨木真（1977・中島）、護国直也（1976・十代田）、渡辺弘（1980・波多江）

カッコ内は卒業年度・研究室



同窓生からの便り

西サモアでの国際貢献

猶克美

(1978年度卒業/猶設計主宰/1993年12月より1995年まで青年海外協力隊のメンバーとして西サモアに赴任)



昨年12月10日に青年海外協力隊(J.O.C.V.)員として西サモアに来て、はや3カ月になる。J.O.C.V.に応募したのが1992年の秋で、試験や訓練などを経て、ようやく現地での活動が始まったところだ。今、私は西サモア政府の公共事業省建築部で設計の仕事をしている。本来の配属任務は建築構造計算だが、構造計算を必要とする建築物が少ないため、今のところ建築設計のなんでも屋さんとして仕事を依頼されている。

西サモアは、ニュージーランドとハワイを結んだ中間に位置した南太平洋上にある。広さは神奈川県とほぼ同じで、大きくふたつの火山島により構成されている。人口は約17万人で、多くはポリネシア系の民族とニュージーランド系の白人(パラギ)たちである。使用言語はサモア人どうしだとサモア語が使われ、英語も公用語となっている。英語が話せれば生活に不自由することはないが、ニュージーランドやオーストラリア英語とサモア独特の訛りがミックスされ、米語を習っている日本人には、最初のうち聞き取る

のがなかなか難しい。

西サモアは世界で一番遅く日の暮れる国として知られている。日本との時差は-20時間で、日本より4時間先の一日前ということになる。日付変更線のすぐ東側に位置しているので、日本での一日のやり直しは西サモアに来ればよいということになるが、その逆は九一日が消えてしまうということになる。

この国にはJ.O.C.V.の隊員と国際協力事業団(J.I.C.A.)の関係の専門家やその他の邦人を含めて、50人前後の日本人が住んでいる。首都のアピア近辺で活動または生活している日本人どうしの交流も多い。アピアには中国系の店舗やレストランなども多くあり物資は豊富であるが、ほとんどが東南アジア(中国、韓国、インドネシア、マレーシアなど)からの輸入品で、質はよくない。物価はそれほど安いとはいえず、むしろ収入の割りに高いものが多い。外国人(日本人やニュージーランド人、アメリカ人)をあてにした店も多く、サモア人はけっして豊かではない。

サモアの社会は、マタイと呼ばれる酋長を中心としたアイガ(大家族)と呼ばれる集団をひとつのコミュニティとして国を構成している。マタイの権力は絶大で、いかなる権力も介入することはできない。選挙権もマタイまでで、国家元首のタヌマフィリ2世は大酋長のひとりである。一昨年アイガの中で殺人事件があったそうだが、警察も介入することはできなかったそうである。軍隊もなく警察も交通整理ぐらいしか仕事もなく、平和な島であるように見える。道路にはアメリカから輸入された左ハンドルの日本車が数多く走っている。しかし10~20年物くらいの中古車がほとんどで、新車はあまり見ることがない。しかしサモア人は、10年以上の中古車を6~7千タラ(約30万円)で買っているらしく、サモア人の年収とほぼ同じくらいの車を多くの人を買って乗っているのに驚く。サモア人は車や電話、ステレオなど新しい(?)ものが好きなようである。またサモア人は音楽がたいへん好きで、音感もよく皆うまい。たいへんな才能をもった国である。昨年7月より西サモアでもテレビ放送が始まり、サモア人も世界の人たちがどんな生活をしているのかようやく知ることができるようになった。まだテレビの普及率は低い、テレビのある金持ちの家に近所の人たちが集まりテレビを見ている光景は、日本の昭和30年代の前半を思わせる。サモア人の生活水準は低く、衛生観念や生活状態などを見ると、日本の明治時代のような。しかし、一部にはパソコンや冷蔵庫、エアコン、ビデオなどの近代文明が入り込み、複雑な文化を形成している。

西サモアの東にもうひとつサモアがあるが、そこはアメリカンサモアと呼ばれ米国領である。西サモアは独立したがために諸外国の援助を受けるようになり、アメリカンサモ

アは米国領となったために豊かであるといわれている。援助がなくては国家財政が成り立たず、援助慣れしてきている国民性に、自助努力をめざす援助のあり方について考えさせられる。

トイレは水洗だが、浄化槽設備や施設がないところを見ると、地下浸透型の水洗なのであろう。島全体が大小の岩より成っているの、水は地下に浸透しやすい。自然濾過されて海へ流れているが、地方では直接海岸に岩を集めてその上にトイレをつくり、直接海へと流しているのも珍しくはない。

飲み水は雨水を直接屋根からタンクに貯めて利用している。アピアには公共水道もあるが、日本のように殺菌処理などはなく、雨が降れば泥水となり、水道より雨水のほうがきれいである。日本のように空気の汚れはなく、雨水や山の水が本当にきれいだ。またこの国の島はサンゴに囲まれ、数多くの熱帯魚を簡単に見ることができ、天然の水族館である。

一番驚いたことは夜空の星の美しさであろう。月は日本で見るとより鮮やかで大きく、星の数もプラネタリウムよりも多いのではないかと思うくらい素晴らしい。地球からこんなに多くの星が見えるとは思ってもみなかった。日本の空がどんなに汚れているか本当に実感できる。日本に帰るのが怖いくらいである。

11月～2月ころは雨期で、残りは乾季と呼ばれる。南半球だから今は夏ということになるが、一年中25度～35度くらいで、20度以下になることはない。四季がなく、一年中蒸し暑いので季節感がまったくない。日本のカレンダーの四季の写真を見て日本の素晴らしさを懐かしく思う。

さて、日本政府のODAの一部として、開発途上国と呼ばれるこの西サモアに、人的援助のために派遣されているのだが、建築の分野の立場から、近代化、開発、環境破壊という流れになることを恐れている。援助が自然環境の破壊につながることを望んでいる。開発途上という言葉は、先進国に近づく過程で自然開発を目指す意味に聞こえ、むしろ発展途上と呼ぶほうを望む。

先進国が発展する過程において、多くの環境を破壊してしまった。同じ過ちは二度と繰り返してはならない。人類はやっと高い代償を払って、地球を守ることに以上に必要なものはないと気がつき始めたばかりである。発展途上国には先進国に失敗も学んでほしいと思っている。

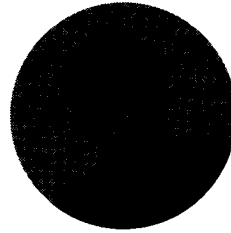
サモア人は明るく陽気な国民である。食生活にも恵まれ平和なんびりとした島であったところに近代文明が入っていくことになった。この国に世界に通用しない感覚もあるが、先進国の身勝手な援助とならないためにも、サモアのものさしで、サモア人の幸せを考えることを念頭に、これから始まる約2年の任期を頑張りたいと思っている。



同窓生からの便り

オランダ留学顛末記

後藤成身（1987年度卒業／日建設計勤務）



オランダへ

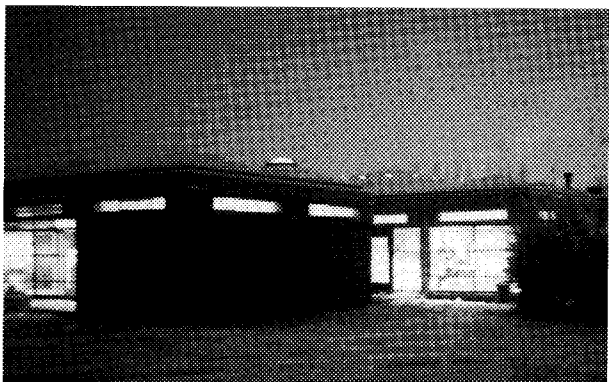
ソウル経由アムステルダム行きの飛行機にどうにか乗ることができた。この2年間かかわってきたホテルのプロジェククトの整理が終わったのは、ほんの数時間前。このところ睡眠が少なかったせい、旅の準備もほとんどできず、ベルラーヘ・インスティテュート・アムステルダム(BiA)の留学に力添えをしてくれた方がたに挨拶もできなかった。

—その飛行機の中、学生時代のシーンが鮮明に思い出された。

私はぶっきらぼうに武藤章先生に問いかけた。

「人を感動させる建築をつくるにはどうすればよいのですか？」

建築デザインとは無縁のように思えた詩の朗読、日本の焼き物のスライド鑑賞を行う大学院の授業にいらだちを感じ、先の質問をした。



上より/
アルド・ファン・アイク設計によるベルラーヘ・インスティテュート校舎
ベルラーヘ・インスティテュート夜景
アムステルダム風景
アムステルダム派の建築

少し間をあけて先生は答えた。

「本当はスライドではなく、本物を見に行くことが良いのだが。建築にかかわらず人を感動させるものをつくるには、より多くのもの、より美しいといわれるものを数多く見ることだと思うよ」。

その授業は修士1年の初夏のころだったと思う。後期の授業が始まり、先生が入院されたと聞く間もなく、その後数カ月で他界された。けっきょくその授業が僕らにとって武藤先生の最後の授業になった。

翌年度の1987年度大学院（山下研究室）を修了。日建設計（東京）に入社。その後いくつかのホテルプロジェクトに参加し、設計・現場監理の実際を体験。元来、デザインを自分の仕事にしたいと学生時代から考えていたため、卒業後の7年間、休みを見つけては日本国内外の建物をできるだけ見るよう心掛け、あちこちへと出かけた。

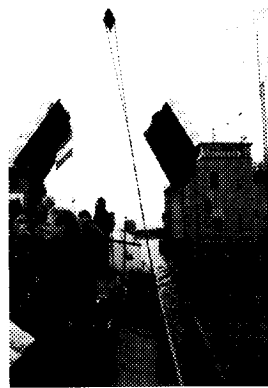
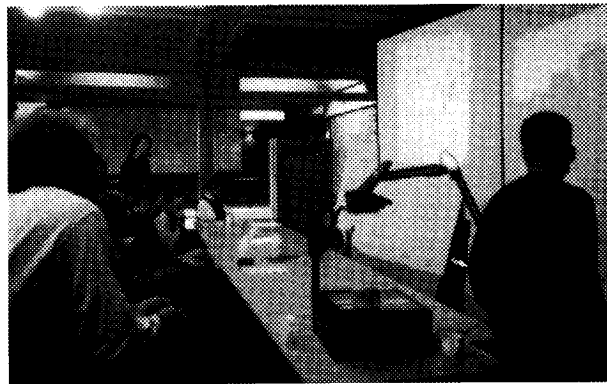
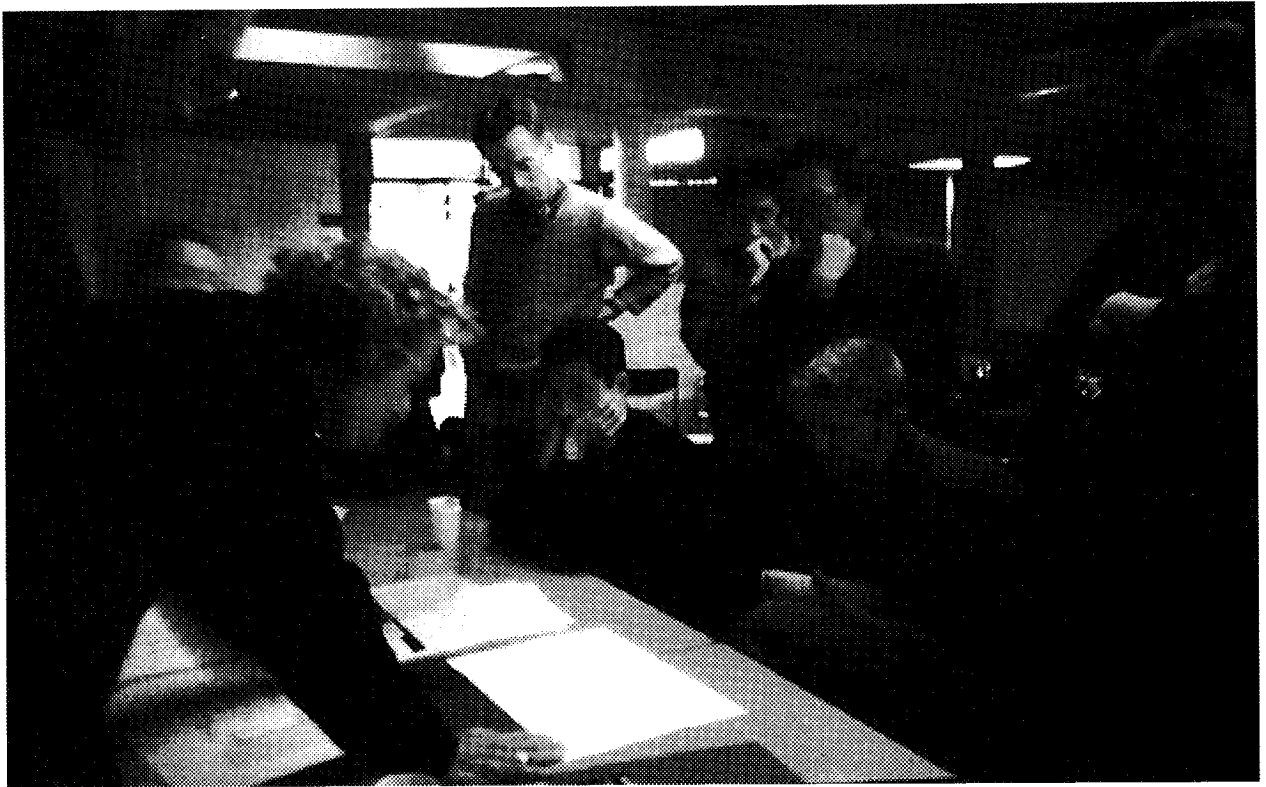
しかしホテルプロジェクトという特異性からか、クライアントとの仕事の打合せのおり「あそこのホテル、あそこの美術館のあのインテリアのようにしてほしい」という要望を受けることもあり、そのおり自分がその建物を知らないで打合せができない以上に、プロとして自分の足りなさを実感した。そのためもっと多くの建物や空間を見たい、体験したいと思うようになった。そして自分の想像もおよばぬ外国の空間を体験するだけでなく、その設計過程を一度見てみたいと思うようになった。また、それを体験するのなら、できるだけ早い時期にその体験をこれからの自分の仕事に役立てたいと思った。

そんなおり人伝てにアムステルダムにあるポスト・グラデュエイト・スクールの存在を知った。アムステルダムはヨーロッパの中央に位置し、また交通の要所でもあり各地へ建築を見に行くにはとてもよい立地条件と思われた。

BiA

アムステルダムに行き、多くの空間体験をしたい。BiAの学長であるヘルマン・ヘルツベルハーに直接手紙で伝えたところ、その案内を送っていただいた。そのカリキュラムは基本的には2年間のコースで、断続的であっても2年間分の単位を消化すれば卒業資格が与えられるというもの。その内容は歴史研究から展示会のインスタレーション、都市計画にいたる幅広いもので、ヨーロッパ各地から建築家、理論家がそれぞれの講座をサポートしている。

去年はザハ・ハデイド、スティーブン・ホールといったビッグネームも、マスタークラスと呼ばれる講座に来校し、学生のプロジェクトの講評や講演を行った。学生数は1年生、2年生を合わせて約30名、国籍もオランダ人だけでなく、ヨーロッパ各国、アジア、アメリカ、カナダから来て



上・左/授業風景
右/クラスメイトとの遠足

いる。また、ポスト・グラデュエイト・スクールのため、一度社会に出ている者が大半。教師陣の国籍もさまざま。そのため公用語は英語となっている。しかし各自にとって英語は母国語ではないため、本当にコミュニケーション手段になっているか、疑問に思う場面もある。また、イギリス人に対して「君の英語は早口だから何をいっているのかサッパリ分からない」という意見すら出る。とにかく、各自が違ったバックグラウンドをもっているため、常識が常識でない。その本質を考えなければならないのがBiAの特徴といえる。

またBiAは小さな学校ゆえに他の大学が備えているような施設は整備されていない。しかし小さいゆえに教師、スタッフ、学生がそれぞれ何を考えているかが容易に分かる。また、その考えを尊重しようとする気風を備えている。これは、学校とは何かを学生に教える場ではなく、学生が自

主的に勉強をする環境を与える場であるというヘルマンの教育方針からきている。

実際のスタジオも、現在の建築デザインの傾向であるピクチュアレスク、グラフィカルな流行を追うもの、机上の空論でない本当の建築・空間をつくろうとすることに主論を置いている。これらはアルト・ファン・アイクやヘルマンらに代表されるオランダ構造主義の建築家たちが作り続けてきた作品の伝統ともいえる。しかし、スタジオでは学生の作品に対するヘルマンの講評に反論が出されることもある。特に講師である若手建築家は、より実験的・コンセプチュアルなプロジェクトを進め、新たな可能性を探ろうとしているからである。

学生にとって、立場の違いによって導きだされる意見に対し自ら判断を行い、その意見を明かにすることはとてもよい機会になっている。



上より/
ヨー・クーネン設計によるオランダ建築会館
ヘルマン・ヘルツベルハーのアトリエ

オランダ建築事情

現在、ヨーロッパはEC統合に向けその気運を高めている。国を越え建築家が仕事を行う状況となっている。しかし、経済の状況は各国にまだまだばらつきがあり全体には不景気といえる。そのため、わずかの仕事は国を越え実績のある著名建築家のもとに流れるというのが実情のようである。ヨーロッパ全体から見るとオランダも経済的には安定しているものの、やはり若手建築家が仕事を得るのは厳しい状況と聞き、どこの国も同じであることを実感する。

そんな中、オランダで体験した建築を紹介する。
今世紀初頭の建築デザイン運動の拠点のひとつとなったアムステルダムでは、街のいたるところに建築史上意義深い建築を見ることができる。駅を中心に半円形状に水路が走っており、その中心は古くからの地区で飲食や歓楽外となっている。周辺地区は今世紀初頭にベルラーヘが都市計画を行った地区。そのうちの一部のアパートは、アムステル

ダム派といわれる建築家たちがデザインしたもので現在でもアパートとして十分機能している。建物のデザインは、オランダ表現主義とも呼ばれるように、とても意匠的なもの。人びとはそのデザインを高く評価するとともに、建物を大切にする。そのためリノベーションや改修を行う折もオリジナルのデザインを尊重すると聞く。実際その街区に立つと、水路・ストリート・広場と建物の関係にヒューマンスケールを感じることができ、好感のもてるものとなっている。個性ある建物はその街区に個性をあたえるとともに街のアメニティを高めるものとなっている。また、これらの建物が現在の自分と同じ年齢の建築家（デ・クラーク、クラメルら）がデザインしたことを知り、驚きとともににか身近なものに感じられた。

現代のオランダ建築について、ヘルマンをはじめレム・クールハース、ヨー・クーネンなどの建築家の仕事はオランダのみならずヨーロッパでも注目されている。特にクールハースの都市や空間に対するコンセプチュアルな計画は若い建築家の指示を得ている。彼の設計によるロッテルダムのクストホール（美術館）は、レベルの異なる公園とストリートを大きなスロープでつなげ、そのスロープを美術館の展示空間に延長していくもので、都市的・空間的に美術館のあり方の新聞軸を試みようという作品として高い評価を受けている。

また、その建物の公園を挟んで南側に建つ、昨年9月にオープンしたオランダ建築会館(NAI)は、とても刺激的な作品といえる。デザインコンペによって決定されたその建物はヨー・クーネンの設計によるもの。池の中に浮かぶそのデザインに対して各方面からの賛否両論の意見はあるものの、公共施設にその奇抜なデザインが採用されたことから見るとオランダ建築界のひとつの方向であることは間違いなさそうである。

感想

この4カ月、オランダを中心に見た建築は刺激的な経験といえる。ヘルマンやクールハースの建築は特に興味深かった。また、彼らの事務所に立ち寄り、その仕事ぶりをのぞいてみると、自分と同じ年齢のスタッフが彼らのスケッチをおこし、図面を描いていることが分かる。そこから世界の著名建築家を自分の身近に感じるとともに、彼らのデザインにかける不断の努力を知った。

武藤先生のコメントから「よいといわれる建築」がどうつくられるかを探ってみてきたが、自分は将来どういうデザインをするか考え始めている。自分の方針を見つかるまでこの探索はまだまだ続きそうである。ヨーロッパのみならず体験したことのない空間を求めて。

工学院大学建築学科同窓会誌『NICHE(ニッチ)』発刊のための賛助金のお願い

ここ数年間お願いしてまいりましたこの賛助金は、ここ数年落ち込みを見せておりました。皆様の賛助金は、いまや『NICHE』の発行を続けるためには欠かせぬ財源になっております。発送費を含めると、本会の予算の大半がこの事業に費やしていることとなりますが、収入原の大半が現

役の学生の終身会費の納入に頼っている現在、増加の一途である会員数を考えますと、経費がまかなえない状況になっております。卒業された方がたのための事業の大半がこの発刊です。なにとぞよろしくご協力のほど、お願い申し上げます。

1987年度実績	356口	226人	総額	712,000円
1988年度実績	365.5口	261人	総額	733,000円
1989年度実績	529.5口	298人	総額	1,059,000円
1990年度実績	464.25口	268人	総額	928,500円
1991年度実績	493.5口	256人	総額	987,000円
1992年度実績	285口	131人	総額	570,000円

1992年版同窓会会員名簿の頒布について

1992年版同窓会会員名簿が残部僅少となりました。ご希望の方はお早めにお申し込みください。

同窓会会員頒布価格 5,000円 (送料を含む)

会員外頒布価格 30,000円 (送料および協力費25,000円を含む)

『NICHE』の賛助金を同じ振込用紙でいっしょにご送金くださって結構ですが、裏面に必ず名簿代5,000円と明記してください。この記入がないと、全額『NICHE』賛助金とみなされてしまいますので、必ずご記入くださいますようお願い申し上げます。

工学院大学校友会STECカード加入のお願い

校友会では、広く卒業生の皆様に「工学院大学校友会STECカード」の加入を呼びかけております。このカードは校友会が企画するもので、VISAかマスターが選べます。

各種サービスとして、

- 1) 住所変更の手続きが、カード会社を通じて自動的に同窓会に連絡され「同窓会名簿」の変更や各種郵送に生かされます。
- 2) 同窓会誌『NICHE』の発送など、各種情報の正確な連絡。
- 3) カード利用代金の一部(約0.3%)が校友会(建築学科同窓会)に還元されます。これは、奨学金などに生かす計画です。
- 4) その他、会員が増えることでさまざまな特典が計画されています。

以上のメリットをご理解いただき、ぜひ工学院大学校友会STECカードにご加入ください。

お問い合わせ・入会申込みは下記まで。

工学院大学校友会

160/東京都新宿区西新宿1-24-2

tel. (03) 3342-2064

第27期(1992年) 事業報告
 第27期(1992年) 一般会計報告
 第27期(1992年) 運用財産目録
 第27期(1992年) 財産運用報告
 第28期(1993年) 事業計画(案)
 第28期(1993年) 一般会計予算(案)

第27期(1992年) 事業報告

- | | |
|------------------|--------------------------|
| 1.同窓会誌「ニッチ」17号発刊 | 2.各クラス、研究室OB会および厚生部会活動援助 |
| 3.名簿の編集、発刊 | 4.準会員への援助 |
| 5.講演会懇親会等の開催 | 6.その他 |

第27期(1992年) 一般会計報告 (単位:円)

予算		支出		決算		収入		支出	
1) 前年度繰越	182,955	1) 会誌発刊費	1,273,000	1) 前年度繰越金	182,955	1) 会誌発刊費	1,262,748	a) ニッチNO.16印刷費	1,042,978
		a) ニッチNO.16印刷費	1,043,000			b) 編集費	200,000	b) 編集費	200,000
		b) 編集費	200,000			c) 雑費	19,770	c) 雑費	19,770
		c) 雑費	30,000						
2) 会費	2,835,000	2) 各部会費	120,000	2) 会費	3,278,000	2) 各部会費	54,200	a) OB通信費	54,200
		a) OB通信費	120,000						
3) 総会発送援助費	691,000	3) 同窓会名簿発刊費	1,336,000	3) 総会発送援助費	688,000	3) 同窓会名簿発刊費	2,392,544	a) 印刷費	1,936,400
		a) 印刷費	1,200,000			b) 整理費	270,000	b) 整理費	270,000
		b) 整理費	100,000			c) 郵送費	94,024	c) 郵送費	94,024
		c) 郵送費	36,000			d) 雑費	92,120	d) 雑費	92,120
		d) 雑費							
4) 雑収入	1,700,000	4) 総会費	2,762,000	4) 雑収入	4,574,000	4) 総会費	2,956,933	a) 総会通知印刷費	481,922
a) 同窓会名簿売上	500,000	a) 総会通知印刷費	510,000	a) 同窓会名簿売上	230,000	b) 総会通知発送費	2,025,650	b) 総会通知発送費	2,025,650
b) ニッチ賛助金	1,200,000	b) 総会通知発送費	2,072,000	b) ニッチ賛助金	864,000	c) 懇親会費	331,538	c) 懇親会費	331,538
		c) 懇親会費	120,000	c) 名簿広告掲載料	3,330,000	d) 雑費	117,823	d) 雑費	117,823
		d) 雑費	60,000	d) 総会懇親会費	150,000				
5) 銀行利息	700,000	5) 本部費	50,000	5) 銀行利息	474,443	5) 本部費	90,181		
				a) 普通口座	10,358				
				b) 積立口	464,085				
		6) 積立金	300,000			6) 積立金	0		
		7) 予備費	267,955			7) 予備費	100,000		
						8) 次年度繰越金	2,340,792		
合計	6,108,955	合計	6,108,955	合計	9,197,398	合計	9,197,398		

2,340,792 - 182,955 = 2,157,837 (増)

第27期(1992年) 運用財産目録 (単位:円)

第27期当初		第27期期末	
1) 三井貸付信託元金	9,500,000	1) 三井貸付信託元金	9,500,000
2) 三井貸付信託積立口	1,171,059	2) 三井貸付信託積立口	1,635,144
3) 第一勧銀普通口座	1,619,271	3) 第一勧銀普通口座	4,458,411
4) 第一勧銀定期口座	7,844,285	4) 第一勧銀定期口座	4,182,041
5) 郵便振替口座	66,110	5) 郵便振替口座	14,700
6) 現金	48,630	6) 現金	23,980
合計	20,249,355	合計	19,814,276

(19,814,276 - 7,387,591) - (20,249,355 - 9,980,507) = 2,157,837 (増)
 35周年記念事業分 35周年記念事業分

第27期(1992年) 財産運用報告 (単位:円)

	収入	支出	備考
三井信託	0	0	
三井信託(積立口)	464,0850	0	1,635,144-1,171,059=464,085
第一勧銀普通口座	2,839,1400	0	4,458,411-1,619,271=2,839,140
第一勧銀定期口座	0	3,662,244	4,182,041-7,844,285=-3,662,244
郵便振替口座	0	51,410	14,700-66,110=-51,410
現金	0	24,650	23,980-48,630=-24,650
合計	3,303,225	3,738,304	3,303,225-3,738,304=-435,079

-435,079 - (7,387,591 - 9,980,507) = 2,157,837 (増)
 35周年記念事業分

会計監査報告 平成5年4月7日

帳簿、領収書監査の結果、記載が正確であることを認めます。

建築業学科同窓会監査委員 高信 碩文 印
 倉持 道夫 印

第28期(1993年) 事業計画(案)

1. 同窓会誌「ニッチ」第18号発刊
2. 各クラス研究会OB会および厚生部会活動の援助
3. 名簿整理・発送
4. 準会員への援助
5. 講演会・懇親会等の開催
6. その他

第28期(1993年) 一般会計予算(案) (単位:円)

収入		支出	
1) 前年度繰越金	2,340,792	1) 会誌発刊費	1,456,500
		a) ニッチNO.17印刷費	1,176,500
		b) 編集費	250,000
		c) 雑費	30,000
2) 会費	4,08,900	2) 各部会費	120,000
		a) OB通信費	120,000
3) 総会発送援助費 (校友会より)	761,260	3) 同窓会名簿整理費	215,000
		a) 整理費	120,000
		b) 郵送費	45,000
		c) 雑費	50,000
4) 雑収入	1,700,000	4) 総会費	3,115,650
a) 同窓会名簿売上	500,000	a) 総会通知印刷費	511,900
b) ニッチ編集, 発送費	600,000	b) 総会通知発送費	2,223,750
c) 賛助金	600,000	c) 懇親会費	500,000
		d) 雑費	100,000
5) 銀行利息	500,000	5) 本部費	90,000
		6) 積立金	2,000,000
		7) 予備費	2,173,902
合計	9,391,052	合計	9,391,052

NICHE

1994

volume

18

工学院大学建築学科同窓会誌